

魔法使いに憐れみを

ishigami

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鍊金術師。混沌魔術師。呪術師。生還者。武闘派。重篤喫煙者。死徒狂い。キメラ。首輪付き。神の贊。

名声に意味はない。称号に価値はない。欲しいのは一つだけ。

百億の夜と千億の死を繰り返し、男は手を伸ばす。

——朱い月に届くまで

第五次聖杯戦争篇、突入。

目

次

m
a
k
e
m
y
d
a
y

8 8 2 / 3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

映画がすごく良かつたから気が付くと色々飛ばして桜編書いてた

91

81

63

54

42

31

16

1

b
i
t
e
s
t
h
e
d
u
s
t

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

3 3 1 5 /

m a k e m y d a y

882 / 3315 /

【 882 】

血みどろ女ブラッディ・メアリ王。

視界の端を跳ぶ雲の色を見て、ふとそんなカクテルが頭をよぎつた。不吉な名だ、そしてこれ以上ない皮肉でもある。わらいたくなつた。しかし実際に発せられたのは、噛み合させた歯の隙間から漏れた苦悶の声だけだった。

ばらまかれた雲が、重力に引かれて地上五〇〇メートル下の深森へと散つてゆく。伸びやかな雲と蒼穹、渓谷に囲まれた景色は壯觀と言つてよく、だからこそ断ち斬られて踊る片腕だけが滑稽な様だった。

宙を蹴るように身を翻し、風を切りながら魔力の糸を飛ばす。掴む。引き寄せる。「【啜ケれ火鳥アーラの涙珠ダーダ】」。はためくマントのなかに差し込み、噴きこぼれる切断面に合わせると発光する筋肉皮質シングルアクションがすぐさま覆い包んでゆく。神經接続。ルーン魔術とも異なる一工程の術としては破格ながら、死徒ならざる躰ではこれが精一杯だった。それでも、まだ動く。魔導元帥の名を冠する宝石剣を握りこんだ指先も。絶望感に喘ぎながら休むことなく走り続いている思考も。そそけ立つような冷気が満ちた。

頭上。生成された鏡像の一〇〇〇を超す槍衾が円陣を組んでいる。

【陽リを束ね矢フと為せク鏡】

降り注いだ。広域展開した反射防壁が、一〇〇を弾いたと同時に砕け散る。稼げたのは僅かだが事足りた。補助礼装もあるマント内部に魔力の風を孕ませて翼とし、飛行へと返り咲く。すぐさま弾雨から離脱を試みるが、射角は無制限であり、これらは躱し切れそうもな

い。
「〔貪食せよ顎〕」

斜めに飛びながら焼却する炎を放つた。槍を呑み込む。滅しきれず飛び出した槍の群れを、動き回りながら焰で更に撃ち落とす。切りがなかつた。次いで膨大な魔力の波動。叫んだ。

「〔陽を束ね矢と為せ鏡〕」

視界が眩く染まつた。反射防壁が消し飛ぶ。思考も。しかし途切れかけの意志が命じる。

「〔精は肉を別たず〕」

息を吸う音で目が覚めた。浮遊感。気を失っていたのか。躰の痺れ、灼けるような痛み。眩暈。血管で電流がうねつてているようなこの感覺は「〔精は肉を離れず〕」による残滓か。「〔魔を以て呪を却す〕」懷から血のように赤い宝石を取り出し、喉に放り込んだ。呑み込む。吐き気など無視した。魔力が腹のなかに溶けてゆく。「啜れ火鳥の涙珠」。神の權能を模した雷撃により、位置は把握した。反撃しなければ。口のなかで唱える。「〔六魂清浄〕」。身体を浮上させ、槍群が迫つてくるのを目視した。勢いは衰えることなく、なればこそ融かすのは諦める。「〔天地を呑め激流〕」水塊の奔流が虚空から放出され、すかさず命中するや連続に発動した。「〔囚擁せよ檻籠〕」

瞬く間に凍り付く。氷の柱が虹のように架かり、飛来する槍の軌道を次々と阻害した。途端に膨れ上がる魔力を感知。臨界に達する寸前に、高速詠唱した宝石剣を振り払う。

閃光と暴威が絶叫し、大氣を劈いた。たちまちその反動に呻き、剣を取り落としそうになる。筋線維の何本かが引き千切れ、躰から魔術回路の一本が死亡したのと引き換えに放たれた光撃は街一つぶんすらも消滅させる威力だつた。

「ふむ」

命中した、そうあつてくれと願つた直後、視界が凄まじい速度で回転し、上下感覺を喪失させた。轟音に塗り潰される。咄嗟に「かたちある盾」と「かたちなき盾」を発動していなければ切り刻まれていたはずだ。そして飛ぶことすらままならない。

「【呪^デを以^スて魔^{ペル}を破す】」。やはり意味はない。渦を巻きながら飛ばされるだけだ。

巨山を覆う嵐のなかにいた。大気が哭きながら搔き混ぜられ、空間が軋みながら捻じ曲げられている。〈空想具現化^{マープル・ファンタズム}〉による局所的大暴風。悪夢だ。悪魔だ。炎も、氷も、雷でも、それらを以てしても逃れることはできないだろう。ならばこのまま、檻樓布のように千々となつて死に果てるのか。

宝石剣。振るおうとした腕が中程から圧し千切れ、彼方へと吸い込まれていった。治癒が甘かつたのか。このままでは骨ごと削り潰される。

「【鐘守^スりは時打^ロことを忘^ウれる】」千層の風の内側の流れそのものがゆっくりになつた。立て続けに唱える。「【暴威^エに請え風雲】」

嵐のなかに、暴風とは真逆の指向性^{カカゼ}が噴出する。衝突し合うことで生じた僅かな均衡。【元柱固具】。護符で四方に急拵えの結界を張り、一時的な静謐の場を作り出した。〈浴びろ火鳥の涙雨^{アラケル}〉で出血だけは止め、印を組みながら懐から巻物を取り出すと歯で噛んで封を解き広げる。片指に引き抜いた一本の髪を挟むと、長巻にびつしりとある墨の文字のうえをなぞるように走らせた。

「【急急如律令】」

針のよう尖った髪が、均衡の外へと飛び出した。息は止めている。ぞわり、と文字が起き上がった。蟲のように羽ばたき出したそれには銀色の牙が生えており、文字たちはすぐさま暴風のなかへと飛び込んでゆく。「【膨満^バせよ虛構】」。口を一文字に結んだまま唱えた。嵐のなかは夜のように暗くなる。墨の色だ。金属の激しく擦れる音がする。存在情報を水増しされた文字たちが風を、魔力を、その牙で以て食い尽くしているためだ。

空の明かりが見え、嵐がついに焼き消された。文字たちは黒い竜巻のように空に伸びると、今度は荒れ狂う龍の如く空へと駆けあがる。その技量から描いたものが実体化するという逸話持ちの宮廷絵師の一〇〇〇年前の作品に潜んでいた魔物だけあって、とにかく獲物を喰らいたくて仕方がないのだろう。それは文字たちの目指している先

に、新たな捕食対象がいるということでもある。

天上から稻光が龍巻を貫いた。文字たちは蟲の群集のように散らされたものの、即座に龍へと再成し獲物に食らいついている。今しかなかった。白紙になつた巻物を閉じて結界を解^{ほど}き、重力に加速して地上へと駆け下りた。素敵の走査を走らせる。どこかに宝石剣が落ちているはずだ。あれなくして対抗は不可能なのだから。感に引つかけた。森。距離にして四〇〇ほど。樹木に引っかかる。指して飛んだ。息はまだ止めている。術の途中に口を開いたりしきつたりすると使役した術者に軒並み被害が返つてくるためだ。嵐という潤沢な神秘を食らい尽くし〈膨満せよ虚構^{バブル}〉によつて強化されている今の文字たちの食欲がこちらに向くようなことは万が一にも避けなければならない。

見つけた。宝石剣。それを握りしめている薄汚れた腕も。

途端に、空から影が差した。予感。突然、地面に叩きつけられていった。凄まじい圧。重力が増大したのか。立ち上がりなれずに這いつくばる。傷口から血が溢れ出している。吐血しながら何とか見上げた。龍だ。炎に包まれている。燃え盛つていてる文字たちの群体が、真上からここへ墜落しようとしている。「【呪^{デス}を以て魔^{ペル}を破す】」。僅かに重力が軽減された。打ち消すことは無理だ、範囲と効果が広すぎる。だが充分だった。

魔力の糸を樹木に飛ばす。引き寄せた。ワイヤーの要領で身体を引っ張り、転がりながら重力干渉下を抜け出す。次いで宝石剣を掴み、ぼろぼろの強化マントに風を送り込んだ。一目散に飛び上がる。間一髪だった。大きく息をつき、ようやく酸素を取り込む。肺が鋭く軋んだ。「【啜^{ケア}れ火鳥^{ルダ}の涙珠】」。千切れていた腕を繋ぎ直す。痛み。生きているあかしだ、慣れたものだつた。背後では落ちてきた龍が雪崩のような音を立てると、燃え盛る蝶の群れのように輝きながら焼滅していた。巻物を森に置いてきてしまつっていたが、本体が消えてしまつた今となつては、あれはただの年代物の巻紙でしかない。

鏡像の槍の雨が降り注ごうとしている今となつては、無用の長物などどうでもいいことだつた。

【暴威^エに請え風雲^ア】

殺到する。展開した暴風を易々と貫き迫る槍に、唱えながら宝石剣を振り払つた。

光撃。

撃墜する。

第二波は来ない。また魔術回路が一本死んだ。まずい宝石を呑み込む。唇に触れた指が、悴^{かじか}んだように震えていた。

【浴びろ火鳥^{アラ}の涙雨^ラ】

氣を許すことは死を意味する。【六魂清浄】。乱れそうになる感情を懸命に整える。

視界から槍群は消えていた。光撃によつて滅し尽くしたのではな
い、向こうが戯れに消しただけなのだろう。圧倒的なまでの余裕の表
れ。対してこちらの礼装は消耗品であり、無限ではなかつた。絶大の
効果を有するはずの真作ならざる宝石剣も、代償を考えれば延々揮え
るわけではない。

それでも。

それでも——まだ、戦える。

〈ほう〉

と、神が僅かに小首を傾いだような、あまりに巨き過ぎて些細な仕
草であつても無視できぬ気配の引力に、冷汗の伝う面^{おもて}を上げていた。
月が、そこに在る。

虹色^{イリス}の輝きを二つ宿した、ヒトを模つた黄金の天体が、矮小な人間を見下ろしていた。

〈おもしろい〉

月がわらう。魚は沈み花は差し入るほどに透き通つた美しい声を
して、悪夢の続きを告げる。

〈ならば〉

空想^{マーブル}具現化^{・ファンタズム}。法則^{ことわり}が書き換えられる。

碧空が、闇に染まつた。

燐々たる星々が見えている。

雲は消え、巨大な二つの月が見下ろしている。

いつの間に夜になつたのか。

——因果干渉者。

——人ならざるもの。

声を、失つた。

——闇を統べるもの。

——神秘を司る精靈。

言葉を失つていた。

——世界最強の真祖。

躰はふるえていた。

——朱い月。

地平線に至る空を書き換えたのか、はたまた第四の次元を操作したのか。

いずれにせよ、規模^{ケタ}が違い過ぎていた。

まだ、戦える。

戦えるとも。

戦つて――

――戦い続けて、だがそれで本当にあれを倒せるのか？

〈確かに〉

絶対的権能の保持者の意のままに、自然^{せかい}は容易く姿を変える。それらは戯れに過ぎないというのに、腰を上げた天体のなぞるような指先は、ただそれだけで最悪をもたらした。

〈こうであつたな〉

月下に、新たな光が生まれている。光は雷のようにうねりながら大きく膨らむと、瞬く間に龍のかたちを作つた。

一〇〇〇年の神秘に匹敵する龍たちが、三体こちらを見下ろしている。

〈ゆけ〉

叫んだ。矮小な己を奮い立たせるために。

食い縛つた。消し飛んだ躰から意識がこぼれ落ちないように。

抗つた。ただひとり。

〈はは〉

抗うだけだ、戦いになどならない。

天才の生み出した礼装を元に改造した月 靈 髄 液も、靈墓ヴォールメン・ハイドラグラム アルビオンで発掘した素材を元に作り上げた致死毒刀も、死徒の生血と骨を蒐集し製作した変幻する刀身なき武具も、最も天空に近い靈山の頂で育てた大いなる風と鋭き雷を封じ込めた呪術礼装も。なんの役にも立たなかつた。

「【滾ダ々と溢れよ暗黒】」

一族に伝わる宝具すらも。

「【絶ア尽せよ靈柩】！」

紙切れのように、打ち破られた。

「……、」

宝石が底を尽く。宝石剣は度重なる過剰出力によつてついに自壊してしまつた。礼装も残つていない。余力も。手足は引きちぎれたままだ。出血を止める程度にしか間に合わず、飛行の精度も攻性魔術の威力も落ちている。あと何があるのか。何を捧げればいい。この命を。しかしそれを使つてすらも、届かないというのか。ことごとくが崩れ去り、絶望を表情に見て取つたのか。

〈もう、終わりか〉

月は、興醒めしたかのように鼻を鳴らした。

〈よい〉

胸から、腕が突き出していた。

呼吸が止まる。凍こうこうしい声は、すぐ後ろから聞こえた。突き出された手には、脈動する心臓が握られている。初めて見るそれが誰の心臓であるのかは、すぐに分かつた。

何かを、言おうとして。

あつけなく果実は、碎け散つた。

〈所詮は〉

天そらが回つた。

翼を失い、心臓を潰された躰は、抗うすべなく地上へと墜ちてゆく。
〈泡沫の、夢であつたか〉

月の眼差しには、失望の色だけが窺えた。

〈精レは肉イを別ズたず〉は、発動しなかつた。

【 映写室 】

博物館のような広さの部屋だった。

夥しい数の仮面が、壁や天井や床にまで、所狭しと放り出されて山を作つている。

仮面の表情やかたちは様々だつた。泣いているように見えるし、怒つてしているようにも見えるし、喜んでいるようにも見えるし、それ以外のようにも見える。

窓はなく、埃っぽい、テレピン油のような臭いが充溢していた。

ここはどこなのか。

強い光を浴びせられ、気が付くと、ここに立つていた。

前後の記憶は断絶している。

部屋の中央に、誰かが座つていた。黒壇を思わせる書斎机には仮面は積まれておらず、しかし映写機のような機械とフィルムが置かれていて、その逆光のために背格好を判らなくさせていた。

真つ黒な影のようになつてている人物が、顔を上げる。

視線。

足元から物音が響いた。

一枚の無貌の仮面が落ちている。

目したと同時に、えも言われぬ恐ろしさと気持ち悪さが全身から

噴き出し、躰を折り曲げた途端、腹の底から込み上げてくるナニカを吐き出していた。

どぼどぼと床にまき散らされたものは、鼻を刺す臭いを発しながら、真っ赤な色をしている。呆然と膝をつくと、広がる赤色のなかで、無貌の仮面が真っ赤に染まっていた。

吐き切つて胸を上下させていると、無貌の仮面が双眸を開いた。無貌でなくなつた仮面の両目は、驚愕に仰け反つて床に尻をついている両目のない男の姿を映し出している。

それが己の姿だと気づいた男は声を上げようとするも、男には唇がなくなつており、喋ることができなくなつていた。

仮面には男のものだつた唇が彫り込まれており、次いで鼻が描かれ、そして耳が増えると、赤色を吸い上げながら、頬や目元の輪郭が次第にはつきりと現れ始めた。段々と顔が無貌へと変じてゆく男は、痙攣するように己の吐いた赤色の上をのた打ち回つており、その姿を煌々とライトが照らし出し、映写機は回転を始めながら与えられた機能を刻々と發揮し、椅子に座る人物はただ視線だけをくれ続けている。

男の躰に、あざのようなものが浮かび上がつた。

あざはみるみるうちに数を増し、腕部、腹部、脚、胸部、背中、頭部へと広がると、たちまち無貌の白い仮面へとかたちを変えた。躰を埋め尽くさんばかりの量の仮面は瞬く間に立体感を増し、やがて偏執狂的批判的方法の発明者の描いた時計のように柔らかく張り付くと、色水を吸い上げているかのように色づき始める。

引き換えに男の躰は白く干乾びてゆき、恐怖を訴えもがいていたらしい顔はもとより、全身を真っ白な姿へと変じ遂げると、首を一度だけ起こしたあとは、人形のように動かなくなつていた。

剥がれ落ちた仮面が、乾いた音を鳴らす。それらはいろいろと/orに染まつておらず、囲まれながら倒れている真っ白な人形は、風にさらされた砂のようにかたちを崩すと、跡形もなく消えてしまつた。

ライトは何もない場所を照らし続けている。吐き戻された赤色の痕跡も残つてはおらず、物言わぬ仮面たちだけが横たわつてゐる。

映写機の稼働音に交じり、一つの足音が響いた。

足音は、ライトを遮るような位置で止まる。その足音の主である人物は無造作に、瞳の閉ざされている真っ赤な色の仮面を手に取ると、無感動にひとり呟いた。

「——【次だ】」

映写機は、稼働し続いている。

【 3315. 1 / January 1998 】

身体を揺らす振動は、微かだった。

カーペンターズが流れている。軽やかでポップな曲調。私からすると外国语だけれど、歌詞はもちろん、歌うこともできた。だてに海外生活が長いわけじゃない。やっぱり素敵な曲だと思った。さすがに人がいるからハミングはしないけども。

ところでいつになつたら目的地に着くのだろう。時計がないから正確にはわからないけども、最後に人里を通つてからたぶん一時間くらいは経っている気がした。もつとかもしれない。景色はずつと同じだ。遠くには山々と、近くには広大な荒野、そればかりで。けれど何もない場所を走つても電波は届くのだから、少し不思議だった。アンテナの性能が良いからなのだろうか。

ハンドルに置かれていた、紙巻き煙草を挟んでいる指がそつと伸びて、ラヂオのチャンネルを回した。いくつか切り替えたところで滑りだしてきたのは、暗い雰囲気のグランジロック。

ニルヴァーナ。四年ほど前にヴォーカルが自殺して、世界中で話題になつたロックバンドの曲だつた。

「聞ハこエてるだロう」と「どハれだけ墮ロちウる?」を何度も繰り返し、なじるような皮肉つた歌詞を叫んでいる。人の生々しい瘡蓋を撫ぜるような曲は、流石に今の気分にはそぐわない。

私は隣を一瞥すると、さりげない仕草を装つて手を伸ばし、チャンネルをカレンの歌声に戻した。

視線を感じる。私は素知らぬ顔で、スカートに皺ができないよう姿勢を直した。先生の車。ポルシェ968という、ドイツ社製のクーペの助手席。私専用の席である革製のシートは柔らかく腰を受け止めてくれて、私はぼんやりと天氣のいい代わり映えしない外の様子を眺める。コーラスを聴きながら。先生はチャンネルを変えず、少し笑つたようだつた。

運転席側の少し開けられた窓から、紫煙が流れてゆく。車内には、普通の煙草とも葉巻とも違う、薄荷ハツカのような独特の香りが漂つている。

「よく眠つてたな」

「眠つてません」

「眠つていただろう」

「目を閉じていただけです」

「うとうとして——」

「いません」

「聞ハこエたぞ」

「え?」

「いびき」

「そんなはずありませんつ」

「まあいい」

「よくありません」

「もうすぐ着く。ちゃんと目を覚ましておけよ。敵陣のなかで爆睡だなんて、剛毅といや剛毅だが、やつぱりかなり間抜けだからな」

答えなかつた。反論するだけ揶揄されるに決まつていて。ぼんやりと気を抜いていたのは本当だけれど、何もそこまで言う必要はないと思う。先生は基本的に皮肉屋で意地悪だ。

ほら、と手が差し出された。いつの間に取り出したのか、包み紙のキャンディが掌に乗つてゐる。

しばらく無視していくも、乗せられたままだつた。

「食べないのか」

「……いただきます」

キャンディは、私の好きな味だつた。

怒りたいような気分なのに怒れなくて、私はやつぱり何も言えずに、外を眺め続けることになつた。飴と鞭。こういうこともそうなのだろうかと思いながら。

【 3315. 2 / January 1998 】

車が、滑らかに停止した。

鬱蒼と草木が生い茂り、路を阻んでいる。雑木林に陽光を隠され、一四時を回つた程度だというのに辺りは随分と暗かつた。

——「この先行き止まり」

鏽び付いた看板には、薄汚れた字でそう書かれてある。

「ここだ」

促されて降りると、ブーツが湿つた土を踏んだ。見回しても目に入るのは樹々の景色ばかりで、これといった不審はない。

無風だつた。それでも空気は、肌につめたい。カーディガンを羽織つた。先生は普段と同じ服装にコートを着てゐる。黒いスーツにグレーのネクタイ。夏場でも冬場でも、どんな現場でも一緒だつた。襟元は一番上のボタンまできつちりと締めてゐる。そんな恰好で、しかも痩身で腕が長くて、目付きも鋭いから、まるで葬儀屋か、もしくはボディガードの人みたいにも見える。あるいは映画関係者。少なくとも、一目見て堅気の人とは考えられないような風貌だ。

「少し待て」

こちらを一瞥した先生が、懷から一枚の、何かの文字の書かれた紙片を取り出した。半分に折り、重ねて折り、更に折り重ねたそれに、ふつと息を吹き込むと、あつという間に紙風船が出来上がる。紙風船

は、先生が手を放してもふわふわと浮いている。

再び先生の指が紙を折るように動いた。今度はゆっくりと。しかし手には何も持っていない。私は声をかけずにそれを見つめていた。先生が口のなかで小さく唱えている。聞き取ることはできない。何度目かの折る仕草をしたとき、突然ボルドー色のボンネットが見えなくなつた。先生は気にせずに折り続けている。最後の工程を折り終えた瞬間、ふわふわと浮いていた紙風船が急に重たくなつたように先生の手に落ちた。まるで「中身」が入つたかのように。

車は消えていた。紙風船を懐にしまうと、先生は次いで紙の人形を取り出して、足元にそつと置いた。

「さ、行こうか」

看板を通り過ぎる、先生の足取りに迷いはなかつた。

「今のはなんですか？」

「アンカーサ。一応な」

【かたちある盾】、「かたちなき盾」。先生が唱えると、空気のつめたさがやさしく和らいだ。大気と肺との間に生じた、透明で不定形な防護膜「守護」の効果によつて。

荒事が起きたたびに先生はこの呪文を使うから、これから何が待ち受けるのかは判り切つていた。荒事そのものは、先生に弟子入りして以来よくあることだから、今さら怖氣づくこともない。

ごろごろしている倒木を避けるように進む。

名の知れぬ草花が雑然と伸びている。擦れ違つたび、スカートの裾は夜露を吸つて重たくなつてゆく。周りはどんどん闇に近づいていく。あと、どれだけ歩けばいいのだろう。

いつの間にか、雨に濡れたような黒肌の岩山が、道を塞いでいた。

先生、と呼びかけると彼は微かに笑つていた。「気づかないか?」「何に気づかない」というのだろう。「よくできた仕掛けだ」

先生は、壁に触れられるほど近づいた。手を伸ばす。

触れたかと思うと、手が岩をすり抜けた。そのまま先生もすり抜けてしまう。

慌てて追いかけると、先生が消えていた。眼前にあるのは紛れもない

く岩だ。まさか幻。触った。やはり実体のある岩だつた。先生はどこへ行つたのか。まさか置いてけぼり？ 焦りながら指先で探つてみると、いきなり手首から先が「向こう」にすり抜けた。隙間だ。ちょうど大人ひとりぶんくらいが通れる大きさの穴がある。意を決し、恐るリ々身体を押し入れた。

潜り抜けられた。しかし、景色は変わらない。むしろ闇が濃くなっている。

「先生？」

小さな声になつた。返事はない。流石に心細くなり、もう一度呼びかけようとしたところで、腕が何かに掴まれた。

「——つ、」

咄嗟に〈魔眼〉を使いそうになつた。

「俺だ。捩じつてくれるなよ」

胸を撫で下ろし、私は細々と息をついた。「先生」少し尖つた声で言うと、濃い闇のなかでも笑つている気配が伝わつてくる。

「こつちだ」

手を引かれるまま歩く。

一分か二分くらいすると、闇の奥に、裂け目のように光の筋が現れた。

「これは——」

辿り着いたとき、私は言葉を失つた。

陽光が降り注ぐ。しかし太陽が中天に座す輝きではなく、むしろ月に明け渡す頃合いの橙だいだいで。

黄昏が、空に溶け広がつていた。外はまだ、そんな時間ではないはずなのに。

呆然とする私の目に更に飛び込んできたものは、囮うようにどこまでも続いている高い塀と開け放された鋼鉄の門、その向こう側に煉瓦屋根の家々が軒を連ねている光景だつた。

まるで街。しかも無人ではなく、どうやら走り回つている者たちもいて、大人や子供たちで賑わいを見せている。

「ここはいつたい」

さながら別の世界、誰かのユメにでも迷い込んでしまったかのよう

な心地で、私は人たちを眺めていた。

「^{リアリティ・マープル}空想具現化」……〈固有結界〉とも少し違うか。色々と混じつて

る。随分と手間をかけたもんだ」

空を見上げていた先生は、独特な香りのする煙草に火をつけながら、独り事のように呟いた。

「それも今日で仕舞いなわけだが。——さて藤乃、いつまでも呆けて

いるなよ。実地訓練を始める。返事は？」

「は、はい。先生」

「よろしい」にやりと笑って、先生が言つた。「では行こうか。楽しい

愉快狩りの時間だ」

【 3315・3 / January 1998 】

「まずはどうする？」

煙草をふかしながら、先生が言つた。ある程度は私に任せてくれるらしい。

——呑まれてはいけない。

深呼吸を一つ。足を踏み出した。先生も後ろからついてきている。門をくぐつた。喧騒が大きくなる。特に、体調に変化は起きていなさい。

氣は抜かなかつた。「門」とは仕切りであり、つまりは結界の内と外を隔てるものだから、相手がそこに踏み入つた部外者に気づいたとしても不思議はない。

それにして、と思う。秘境の集落と云うには些か大きすぎるから、これは近代の隠れ里とも言うべきだらうか。

まるでヨーロッパの田舎町の風景だつた。たくさんの家があつて、大勢の人たちが集まつて、普通に生活を送つてゐるよう見える。危険な死徒の魔術師が潜伏していると知らなければ——此処へ来るまでに辿つた道程を知らなければ、この賑わいに不審など考えもせぬ、むしろ郷愁ノスタルジックな異国情緒の景観に、感嘆の息さえ吐いていたかもれない。

それほど広くない石畳の道路で子供たちが遊んでいる。追いかけつこだらうか。近くでは親らしき大人たちが歓談していた。壁には台車が立てかけられ、街灯はあえかに点つていて、

ボールが足元に転がつてきた。

少年が走り寄つてくる。心臓が早鐘を打つた。魔術師の手先である可能性が過ぎる。周囲に怪しい動きはない。ちらと振り返ると、先生は別のところを見ていた。

あれ、お姉さん？ 少年が近づいてくる。もしかして外から来たの？

「あなたは」

少年がボールをつかんだ。後ろから親らしき歳いつた婦人が現れる。苦笑していた。ふくよかな体形。武器を隠すならスカートの中だろうか。少年をたしなめている。それから、私を向いた。あなたたち、外から来たのね？

慎重に頷くと、女の口元の皺が歪んだ。

いらっしゃい、よく来たわね。手が伸ばされる。ここは素敵な街よ、きっと気に入ると思うわ。白い腕。握り返さなかつた。婦人が不思議そうな顔をする。どうしたの？ 婦人が私を見る。私は彼女の腕を見ている。まったく日に焼けていない、不自然なほどに真っ白い、皴のない肌。

粟立つような感覚がした。

〔〕

飛び退くも、追うように婦人が踏み込んできている。その瞬間、私の双眸は琥珀から赤色へと変じ、「呪」を唱え終えていた。

「【凶れ】^{まが}」

婦人の腕の関節が捻じれ、瞬く間に碎けた。引き千切れた左腕が地面を跳ね、金属音を立てると、しかし人体にあるべきものが撒き散らされることはない。

婦人は、わらつたままだつた。片腕を失つた状態でありながら、鮮血を噴き出すことなく小首を傾げて。困つたひとね、そう言いながら、体躯に似合わぬ俊敏さで眼前を蹴り上げてくる。

「【凶れ】

危うく仰け反つて躲した。突き出された脚が破壊されると、飛び散つたのは筋線維の塊と骨だけではなかつた。宙を舞う歯車が、黄昏に煌めく。

〔〕

婦人と子供の頭部が風船のように膨らんだ。「凶——」

【粉碎せよ戦槌】

猛烈な閃光が視界を染める。凄まじい電撃に親子が吹き飛ばされると、中身を露出させて蠢き、二人は衝撃を噴きながら飛散した。けれどそれは音だけで、爆風はこちらに届く寸前に薄れてしまう。私たちに掛けられた〈かたちある盾〉と〈かたちなき盾〉の効果が、体内に仕掛けていたらしい爆薬の威力を、害なきものへと書き換えたためだつた。

「自動人形か」外皮が溶けて中身が露わになつた残骸を見やりながら、先生が呟いた。「気を抜くなと言つただろう

「……すみません」

爆発とも異なる、重々しい物音が響いた。

背後。

開かれていたはずの門が閉じている。

「まあいい。これで正体が明らかになつたな」

遊んでいた子供たち、大人たちが、統一された仕草で私たちを見つめていた。一様に人間味の抜け落ちた貌。これが彼らの、本当の姿ということなのだろう。

「招け睡惰の深淵】

着香された風が走り抜けるも、人形たちに変化はなかつた。先生が首をかしげる。「精神を模倣した機械ではないのか……」

【凶れ】

飛び掛かろうとしてくるのを、私は冷静に認めていた。【凶れ】。今度は腕ではなく、自動人形の上体が捻じ曲がつて潰える。人形たちは悲鳴一つ上げずに這いつくばり、やがて機能を停止した。

「少し手間だな」

家屋のシャッターが次々と上がり始めている。現れる大量の人形たち。人でない形態のものも混じつていて。四足歩行。さながら大型犬のそれらが本物と違う点は、口が恐竜のように凶悪で、胴体が金属らしき剛性の素材であるということだつた。

見た者を委縮させる光景。脅威という言葉がまさに相応しい。

それでも――

「射貫く光」

「凶れ」

見るだけで現実を曲げてしまえる私の生まれつきの異能は、先生にいわく「赤」と「緑」の螺旋を描いて、私の敵を「破壊」する。的当の練習と同じように。

抵抗を無視して。

反発を透過して。

私は〈歪曲〉をもたらす〈魔眼〉で、先生は灼熱と雷撃で、人形たちを近づけることなく蹂躪してゆく。

人形たちの斬撃や決死の自爆が、私たちに届くことはなかつた。

「しかし数が多い」

【融かす舌】。そう唱えながらややうんざりしたような声で、先生が言つた。「走り抜けるか?」

その提案に、はい、と応えながら私は、すぐさま躰に命じる。

「回路励起」――

それは魔術回路を持つて生まれなかつた私の、変則的な魔術行使。

――構成材質、〈解明〉。

――身体機能、〈強化〉。

〈魔眼〉に備わつた魔術回路を経由することで、私は組み上げた術式を現実の世界へと反映させる。長い鍛錬の末に習得した運用技術を以てして、私は下肢の運動性能を〈強化〉する。

「ではどこを目標とする?」

私は、すぐに懐から「魔力針」を取り出した。方位磁石のそれと違つて、磁力ではなく魔力を探知するこの自作の魔術礼装は、反射率によつて透明にも鏡になる特殊なガラスの箱で出来ており、「針」は手に乗せたときからぐるぐるとひつつきりなしに回つていた。

【鏡よ鏡よ】――

近寄る人形は、先生が蹴散らしてくれている。私は、私の血を垂らされて先端が赤くなつてゐる「針」に向けて唱えながら、同時に最近使えるようになつたもう一つの〈魔眼〉に、意識の〈チャンネル〉を

切り替えた。

軒を連ねる赤煉瓦屋根

迷路のように曲がりくねつた石畳の道路

真つ赤な水堀に囲まれた門と城

——それら街の俯瞰風景。

途端に脳裏に、いま自分が立っている場所ではない、見も知らぬ街の膨大な情報が脳に流れ込んできて、私はよろめきそうになってしまった。

「——つ、」

音。人形の碎け散る音だつた。再び私の意識は、自分の躰に戻つてきている。

二秒と経つていなければだつた。千里眼。ほんの一瞬の行使でありながら、無用な体力を使つていた。まだ使い慣れていない、もつと練習しないと。先生は何も言わなかつた。私は息を整えながら詠唱を続け、忙しくくるくると回る「針」を見つめた。

——教えて、私の求めるそれはどこにあるの？

「[鏡 よ、応えて]」

“マイ・ディア”と返す言葉はなかつたけれど、「魔力針」の回転がぴたりと止まつた。一点を差し続けている。

神の視座で獲得した情報を元に、降霊術で探す。要するにダウジングと同じ要領の「魔術」であり、顕著な反応があつたということは上手くいつたという証だつた。

〈千里眼〉で見た風景と、針の指示する方角を脳裏で重ねようとして

突然、「魔力針」が振り切れるような勢いで回転した。突き上げるような振動が起こり、足元が脈動するように大きく揺れる。

正面の家屋の玄関扉が下から盛り上がり、家屋は激しい駆動音を立てながら「かたち」を組み替えてゆく。石畳が引つ繰り返り、道路に差していた影がみるみる長さを伸ばすと、完成したそれは、呆気に取られている私を見下ろした。

一〇メートルはあろう巨大な威容。

あらゆる銃弾を弾き返すであろう分厚い装甲の、人型。

鋼鉄巨人ゴーレム、あるいは巨大的なる宝守り。

遊園地かよ

飛び掛かつてきた人形を雷撃で吹き飛ばしながら、先生が呆れたよう

に言つた。

鋼鉄巨人が、倒壊した家屋のなかで唯一かたちを残していた煙突に手を伸ばす。膂力に任せて引き抜くと、それは巨人の掌にぴつたりと収まつた。一步おきの地響きに、碎け散つた煉瓦が驚いたように跳ね上がり、また一步、もう一步と、一〇メートル級の二足形体としてはありえない素早さで近づいてくる。

常人であれば腰を抜かすような光景だつた。額に「EMETH」の文字があつたところで、立ち向かうという根本の意思すらも挫くであらう重圧。常識から外れたこの凄まじい異形は、きっと敵対者を廻殺せしめる思想のもとに設計されている。

けれど――

「無駄です」

「チャンネル」を切り替える。

赤くなつた私の双眸は、「それ」を視る。

私の「歪曲」は、「それ」を捻じ曲げる。たとえ「それ」が――
どれだけ硬い鉄であつたとしても。
どれだけ怖い敵であつたとしても。

【凶れ】

私の「破壊」はあなたたちを上回り、碎く。

【凶れ】

捻じ曲げて、碎き裂く。

捻じ曲げて、碎き裂いた。

捻じ曲がり、碎き裂かれた巨いなる威容が崩れ落ちる。土砂のような振動と中身を撒き散らし、道に散らばる他の残骸たちのように呆気なく、機能停止する。

駆動音はまだ続いている。今しがた破壊した巨人のものではなく、背後から――ばかりか視界にあるものだけでも、至る所の盛り上がつ

た家屋から鳴り響いている。もしもこの道路だけではなく、街全体から発せられているとしたら、とても良い状況とは言えそうになかった。

「大量の人形に大量の巨人。飽和戦術と真っ向からやり合うのは下策だ」

「どうするんですか」

にやりと笑つた先生は、懷から五枚の靈符を取り出した。

「【元柱固具】」

すると四枚の護符が勢いよく四方の地面に張り付いた。一辺はそれが均等の距離であり、次いでもう一枚の、複数のルーン文字が組み合わせてあるそれが宙に掲げられると、いきなり護符から水が大量に噴き出した。「先生っ」慌てるも直後、噴き出した水は不思議と先生や私の服を濡らさずに、一瞬で霧になつてしまふ。家屋の倒壊する音も、聞こえなくなつていた。

「俺の手を」

「は、はい」

「【霧は眞意を欺く】」

声を上げそくなつた。いつの間にか私の目の前には、手を握つているもうひとりの私と先生が立つっていた。

「これは」

「身代わりだ。さて、御髪を一本拝借」

更に先生は紙の人形を二つ取り出すと、私の髪と自身の髪をそれぞれに結び付け、もうひとりの私たちの背中に貼り付けた。

「多少は誤魔化しが効くはずだ。あとは」

【回路励起】。そう一瞬で自身を〈強化〉し終えると、先生はびっくりしたままの私に言つた。

「これからもう一つ術を使うが、決して声は出すなよ。状態を固定するから以降は攻撃も控えろ。術が解けてしまうからな」

「はい、あの」

指で、唇を抑えられた。先生が首を振る。そして小さいながら、
暁りょうりょうとした声で唱える。

「霧は真意を謀る」

特に変わったことは起きていない。始めはそう思つたものの、先生が更に唱えると霧が晴れ、そこで私は目を疑つた。先生の身体の向こう側の建物が、透けて見えるようになつていて。自分の身体を見ても、同じように半透明になつていていた。

先生が背中を軽く押すと、偽物デコイたちはこれまでに来た道を軽やかに逆走し始める。人形や鋼鉄巨人らは、走り出した分身を追うように移動して、駆動音はすぐに遠のいてしまつた。

辺りには私たちと、起動していない煉瓦家屋が残されているだけになつていて。

——凄い。

先生がハンドサインを出した。「行くぞ、気づかれないうちに」。私は頷き、走り出したその背中を追うこととした。

【 3315. 4 / January 1998 】

「ほうほう。それからそれから、君たちはどうしたんだい？」

まだ幼い少女が、ソファードに腰かけながら目を輝かせている。

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。美しい金髪と愛くるしい容姿、一見すると儂げでさえある彼女が屋敷を訪ねてきたのは、太陽もすっかり沈んだ夕方頃のことだった。

先生の——本人曰く、趣味と実益を兼ねた——危険な仕事である魔術師狩りから帰国したのが二日前のこと。アサガミ・フジノは今日からまた時計塔に通う日常に戻つていたけれど、それを聞きつけたライネスが学校のあとにアポイントメントも無しにやつて来て、こうして私に魔術師との戦いの話をせがんだがために、私は合間々々にお茶菓子をつまみながら、あのときに見た光景を語つてあげているのだった。

「そのあとも、大変なことばかりでしたよ」

私はソーサーにカップを置くと、年の離れた可愛い妹のような彼女に、苦笑しながら続きを語る。「私たちは、お城を目指していたんですね

が……

城は一〇〇メートルはありそうな水堀に囲まれていて、いざ近づこうとしたところで、門番の役目を与えられていたらしい三人の魔術師の死徒と戦うことになり。

「そ、そこ手強かつたですが」

撃破して、それから水堀を飛び越えて、いざ門の封印を解いて城に入つてみたら、外からは想像もつかないほど広い庭と、たくさんのお花が咲き誇つていて。

「優に五〇ヘクタールは超えていたと思います」

ライネスが、ため息を吐きながら瞳を閉ざした。隅々にまでいっぱいに咲いた、季節外れの、赤い薔薇の壯麗な景色を想像しているのだろうか。

写真に撮つてくれればよかつたかも、とちよつとだけ後悔が過ぎつた。

「それで花園を進んでいたら、やつぱり大きなお城が見えてきて」

白亜の円柱と大理石の廊下。ほとんど宮殿のような大きな空間を探索していると——今にして思えば、狙われていたのだろう——部屋を移動した瞬間に私たちは分断され、そのままはぐれてしまうピンチに見舞われたのだつた。

「迷子になつた私は先生を探そうとしたんですけど、部屋を出ようにも、扉の向こう側には別の、未知の部屋にしか繋がつていなくて。仕方ないからそのまま壊して進むことにしたんですけど」

「フジノは果斷と言うか、大胆な決断をする時があるよね。普段はぜんぜんそうは見えないのに」

褒められているのだろうか。

「失礼いたします」

談話室の扉が開き、黒髪の背の高いメイドが入つてきた。

「藤乃様。アーチゾルテ様。お夕飯はいかがなさいますか？」

アムネヒルダは冷たいと誤解されがちな眼差しで、答えに迷つているライネスを見つめる。食べていつたらと私が誘うと、おずおずといつた様子で頷いた。

「かしこまりました。ではアーチゾルテ様のお食事も御用意させていただきます」

ホムンクルスである彼女は、一礼すると音も立てずに部屋から出て行つた。私は空になつたダージリンを注ぎ、蜂蜜パンケーキの一切れをつまんだ。ライネスはじつと居心地悪そうに黙つてゐる。

「苦手ですか、彼女が？」

「まさか。そんなのじやないさ」カツプに口をつける。「逆だよ。ああいうのも悪くないなつて。それより話の続きを」

私はそれ以上は追及せずに、語りを再開する。

迷子になつた私は様々なトラップの仕掛けられた部屋をなんとか潜り抜けると、「魔力針」の指示する先生のいる儀式広間にやつと辿り着くことができたところで、先生の足元に縫い付けられていた、瀕死の死徒を目にすることになった。

——「言つた通りだろう。俺の弟子は優秀なのさ」

——「貴様らは……私を、私の故郷くにを！ どこまで！」

——「幻だ所詮は。もうお前に用はない」

あのときの先生の恐ろしい微笑みと、死徒の怨嗟の響きを私は記憶している。

——「我が残骸はらわたりで朽ち果てるがいい魔術師！」

——「お前の〈魂〉は俺が有効に活用してやる。安心して死に果てる吸血鬼」

「フジノ？」

——「[元素転換]ジユエル」

十字を模したレイピアのような剣で貫かれた死徒が、赤い稻妻のような輝きを放ちながらかたちを変えてゆく。貌には恐怖が張り付いていた。光が消えた時、先生の掌には緋色の宝石が煌めいていて、死徒の姿はどこにもなくなつてしまつていた。

恐ろしい魔術。私は先生が「混沌魔術師」と言われていることを知つてゐる。鍊金術師、呪術師、あるいは死徒狂いとまで言われ蔑まれ同時に恐れられていることも知つてゐる。けれど私は先生の弟子でありながら、先生のことの多くを知らずにいる。

「フジノつてば。そんなに引っ張らなくてもいいだろう」「

「ごめんなさい、それから……」

考え込みそうになるのをかぶりを振つて抑え、私は一連の顛末を語る。

魔術師を斃したあと、城を出た私たちが見た光景は、悪夢のように一変した街の様子だつた。

「街が消えていたんです。代わりに海が広がつていた」

本物の海であるはずはなかつたけれど、あれはそうとしか例えようがなかつた。黄昏のように赤く、どす黒い魔力で満ちた海。啞然とながら明るい空を見上げると、そこには数えきれないほどの人間たちが宙で逆さ吊りに列を為していた。

「海の正体が何であるのか、わかりますか？」

顔をしかめているライネスが、もしかして、と口にする。「その人間たちの血か」

「ええ」

海が生まれるほどの血液と呪い。魔術を扱う人間の言葉ではないけれど、狂氣とか悍ましさとかの単語が思い浮かぶ以前に、あまりにも現実味が欠けていた。

先生は、それほど驚いていない様子だつたけれど。それでも街が無くなつたことで出口も消えてしまつていたから、地響きがして大きなお城も崩壊し始めて、更には黄昏から落ちてくる粘性の泥や瓦礫が水飛沫をあげながら海に沈んでゆく光景には、ますます私も不安でいっぱいになつていていたのに、あろうことかそのときの先生は煙草に火を点けると、その場でのんびり然と一服を始めたのだつた。

「君の師匠は相変わらずぶつ飛んでるな。流石のフジノも殴りたくなつたんじやないか」

笑つて誤魔化した。ほんの少しだけ捩じつてやろうかと考えたのは、内緒だ。

ともあれ一息ついた先生は、煙草を携帯灰皿に捨てるときもなかつたかのように私に言つた。

——「さて、帰るか」

そして、私たちは戻ってきたのだった。

「いやはや、まつたくたいした冒険家だな君たちは。毎度のことながら、よく生きて帰つてこれたものだよ」

先生が結界に入る前に設置した「アンカー」。アレがなければ、今頃私たちは吸血鬼の体内のなかで養分になつていたかも知れない。先生は結界のなかであんなことが起きると分かつていたのだろうか。

「君も変わつている」

「なにがですか？」

「聞く限り今回の死徒は、とんでもない〈大魔術〉の使い手だつたわけだろう。そりやあ大禁呪の発動に立ち会えるのは垂涎ものだけど、だからと言つてそのたんび死にかけていては、何個命があつても足りないさ。それに付き合う君は、なにか弱みでも握られているのかい」

「先生は、私のお師匠さまですから」

「そりやあそうだけども。^{いや}厭になつたりはしないのかい？」

私は思わず、ぽかんとしてしまつた。その質問が、あまりにも唐突なものに感じられて。

「なんだいその顔は」

「いいえ。そうですね、たしかに先生は、皮肉屋で、意地悪も言うし、……ときどき恐いと思うこともあります。でもね、ライネス」

私、あの人役に立つことができて、それだけで嬉しいの。

「……、

だから、一緒にいて厭と思つたことは一度もないのだと、そう私が微笑むと、目の前の少女は毒氣の抜かれた面白い表情を浮かべていった。私は、小さく声に出してわらつてしまふ。この幼い友人は、生粋の魔術師の家系に生まれたにしてはとても常識的な感覚を持ち合わせてもらっているから、もしかすると私に不満がたまつていると考えて、勞おうとしてくれたのがもしそれない。

だけど私は、たとえあの人人がどれだけ恐ろしい人であつたとしても、そのことを理由に彼から離れたいという発想をしたことがなかつ

た。先生に気を遣つて嘘をついているわけでも、無理をしているわけでもない。ともすればライネス以上に一般的な倫理観にずれがある、そんな私にとつて何よりも大切なことは、彼があの日からずっと、私にとつて大切なものを与え続けてくれているということだった。

かつては「鬼子」と忌み嫌われていた私のこのちから。

私のなかの鬼。

私が「鬼」になることで、私の躰を治してくれて、私を認めて世界へと連れ出してくれて、私に帰る場所を与えてくれた彼の役に立てるのなら——私はきっと、どんなことにだつて耐えられる。

冷厳なほどに繰り返す煩雜で難解な魔術の修行にも。

同じ人間である魔術師を無残に討ち滅ぼすことにも。
彼が望むのなら。

耐えられるし、きっと成し遂げてみせる。

……私の考えはたぶん、人でなしのそれなのだろう。それでも。彼が恐ろしい人であつたとしても、あの初夏の日に出会い、彼と結んだ最初の契約が、私のなかで色褪せるということはない。

何故ならアサガミ・フジノにとつて、彼のために「鬼」になるという約束は、業のように甘美な実感を与えてくれるものだから。

「友人宅を訪ねたらパイを投げつけられた気分だよ。それもとてつもなく甘いパイだ」

「友だち、できただんですか？」

「うぐつ」

「やりましたね。安心しました、友人が私だけじゃなくて。少し寂しい気持ちもしますけれど……そうだ、お祝いしましようか」

「いいよそんなのつ。友だちなんてべつに、私には必要ないし。……君の勘違いだ。アーチゾルテの娘に相応しい友人なんて、そうはないんだから」

「私は、違いましたか？」

「それはつ。——き、君は特別枠だ。感謝したまえ」

「えつと？」

「だから、君は私の友だちで……つ」

「ええ、そうですねライネス。私も、あなたのこととは大切な友人だと思っていますよ」

「ああもうっ！ まつたく……この話はよそう。何か他の話にしよう。そうだ、最近聞いた話なんだけど——」

ころころと表情が変わる彼女の様子を楽しみながら、私はふとあの日のことを思い出す。まだ何も知らなかつたわたしが私になるために交わした最初の契約の日のことを。魔術師としての人生が始まつたきっかけである、可哀そうな黒衣の魔法使いとの在り得ざる邂逅を果たした日の記憶を。

——「君を五〇億で買った」

——「君の躰を治し、君に世界を見せる代わりに、君の力を俺に貸してほしい」

——「俺を、……助けてほしい」

その記憶を誰かに語ることはない。これは、私たちだけの永遠の秘密なのだから。

【 3315・5 / January 1998 】

〔藤乃〕

先生が言つた。

「おかえりなさい」

「ああ。土産にシュークリームを買つてきた、冷蔵庫に入れてあるからあとで食べるといい。ライネスも。ゆつくりしていけ。じや」

顔を出すと、すぐに先生は消えてしまった。

「なんだか、機嫌が悪そだつたね」

「だいぶ疲れているみたいでした」

朝は体調は悪くなかったはずだから、たぶん精神的な疲れ。舌戦でもしたのだろうか。先生を疲れさせることができ相手は、時計塔にはそんなに多くいない。

よく話すのがライネスの義兄であるロード・エルメロイ二世だけれども。もしかすると、と心当たりが浮かんだ。魔術師／死徒討伐に関連するもの。そうだとすれば、死徒に強い執着を持つバルトメロイ派かもしだれない。私も声をかけられたことがあった。かなり高压的な態度が印象の人たち。予想を話すと、ライネスはまるで巨大なムカデか蜘蛛を見たような顔になつていた。

しばらくすると、下の階から激しい音楽が漏れ聞こえてきた。防音加工の施された部屋に引き籠りながらレッド・ツエッペリンやアイアン・メイデンといったヘヴィメタルを爆音で流し続けるという、お医者さまも匙を投げそうな先生のストレス解消法の一つ。やっぱり、何かあつたらしい。

後になつて、私は私の予想が的中したことを知り、しかも実はそれが、先生と現代魔術科とバルトメロイ教室間を巡るちょっととした騒動に繋がることになるのだけども、このときの私はなんにも気づかないままライネスと一緒に、もう一人のメイドであるオルテミリヤが夕食を呼びに来るのを待つことにしたのだった。

[3315・6 / October 1998]

人ごみのなかであつても、着物姿というものはやつぱり目立つ。人ごみでなければ尚更だし、しかも着こなしている人の容姿が美形であれば嫌でも目を引く。それでも彼女とすれ違うだけで声をかける者がいなのは、やはり高嶺の花が醸す楚々とした雰囲気と、冷ややかで静謐な眼差しが近づくことを敬遠させるからなのだろう。

〔式〕

〔……幹也か〕

着物の上から赤いジャンパーを羽織った彼女が振り向き、僕らは肩を並べて歩き出した。

〔偶然だね。学校は?〕

〔今日は午前で終わりだ〕

〔そつか。……どうしたの?〕

〔なんでもない〕

そう言っているくせに、その綺麗な両目は呆れたものを見る眼差しで。式がきちんと通っているのを、僕が喜ぶのはそんなにおかしなことだろうか。

〔ついてくる気が〕

〔だめかな。これも、何かの縁だろうと思つたんだけど〕

〔おまえ、暇なの?〕

〔それは、まあ」歯切れが悪くなる。仕事がないという意味でなら、ご指摘の通りなものだから。「そう『言えなくもないかな』〕

〔……好きにすれば〕

やつぱり、呆れられてしまつたみたいだつた。確かに自分でも、不甲斐ないとは思う。

〔どこへ?〕

「喫茶店」

「式が!？」

大声のあまり、式の目が三角になつていて。「あのなあ。オレだつて喫茶店くらいは利用するぞ」

「ごめん。正直言つて、驚いたよ。どこの喫茶店?」

「失礼なやつだな。おまえも知つてるとこだよ」

「アーネンエルベ? もしかして、待ち合わせだつたりする? だつたら僕は」

「今さら気にする相手じやないだろ。なんてつたつて橙子だし」

「橙子さんと?」それつて、つまり。「珍しいね、事務所じやないなんて」

「オレに会わせたいやつがいるんだとさ。まつたく、なら向こうから顔出すのが筋つてもんだろうに」

アーネンエルベ

遺産

ドイツ語で書かれた看板を確かめて、僕たちは入口のベルを鳴らした。

アンティークな雰囲気の喫茶店。ランチタイムからそれほど経っていないというのに、客の入りは少なめだつた。此処の照明は壁に穿たれた窓の陽射しのみだから、窓際のテーブルは浮かび上がるようになるく見えて、対照にカウンターの奥は影ができるほどに暗くなつてゐる。

目的の人物たちは、窓際の四人掛けに陣取つていた。そこに予想外の人物を見かけた僕は、危うくまた声を上げそうになつた。

「鮮花」

「兄さん?」

妹が、あんぐりと表情豊かに驚いている。その隣で僕たちを一瞥し、煙草を吸いながら片手を上げたのは橙子さんだつた。「早かつたな」

鮮花の前には、鮮花と同じ歳くらいの大人しそうな少女が座つていて、何故か式のほうをじつと——それ以外は目に入らないというように——見つめている。そんな彼女の横で煙草を吸つていたスースの

男性は、先ほどから双眸を蒼くして黙り込んでいる式を見やると、笑みを湛えながら口を開いた。

「久しぶりだな、両儀シキ」

「……おまえ、なんで死んでないんだ？」

親しげに言つた彼へ、式はどんでもないことを言い放つたのだった。

【 3315. 7 / October 1998 】

視界に入った瞬間から、普通の人ではないと感じた。

「おまえ、なんで死んでないんだ？」

着物の女性が、先生に向けてそんなことを言う。彼女の深く蒼い双眸に、私は恐怖とよく似たものを感じてしまつて——滅多にない、自分の感情の動きに意表を衝かれたことで——私は〈魔眼〉を開きそうになつた。

〔藤乃〕

先生に窘められていなければ、私は〈歪曲〉を行使していたかもしれない。

「おいなんだ急に、おまえたち。顔を合わせて一秒で殺し合いでもする気か？」蒼崎女史が引き攣つた顔をしている。「知り合いだつたのか、式？」

「知らない」

答えたのは、着物の人だつた。既に両眼は蒼くなくなつてゐる。つまり、彼女も私と同じ〈魔眼〉の持ち主ということなのだろうか。その目が、私のほうを向いた。綺麗なひとだ。不思議な感覚がした。初めて会つたはずなのに、私は今、この人のことをあまり好きになれるうにないと感じている。まずそんなふうに考えてしまう自分が意外だつた。たとえ不躾なことを言つてくる相手でも、私は、あまり人を嫌いにならない性格だと思つていたのに。

「そうだな。君には会つていない。君とは初対面だ、初めまして両儀式。俺はハウヅキだ。こつちは弟子の藤乃。よろしく」

「勝手によろしくしてろ」

「式、あんたねえつ」

鮮花がテーブルから立ち上がり怒っている。式、と呼ばれた女性は蒼崎女史を睨みつけると、そのまま踵を返した。彼女の背中に先生は怒った様子もなく、むしろ苦笑しながら呼びかける。

「確かにようろしくするほど親しくはないな。ただ君には借りがある、それを返そうと思つてね」

懐から取り出した黒い小瓶を放り投げると、両儀式は後ろに目が付いているかのようにそれを掴み、胡乱な視線を向けてきた。

「借りなんて知らないぞ」

「だろうな。俺がそう思つてているだけだ、助けられたと。ただ、それは取つておけよ。いずれ必要になる」

両儀式は、連れ合いらしい人の良さそうな眼鏡の男性に小瓶を押し付けると、喫茶店から出て行ってしまった。

「……なにあいつ！」

「いいのか？」

蒼崎女史が呆れ顔で先生に言うけれど、先生は気にしていないらしい。煙草の灰を、テーブルの中央に置かれた猪口のような陶器に落としている。備え付けの灰皿ではなくて先生が持ち込んだものだ。魔道具であるらしく、先生と蒼崎女史の手元から立ち上る煙は小皿の上に吸い寄せられながら螺旋を描き、猪口の直径からはみ出さないよう、積乱雲の塊のようになつて滯空している。

「すいません。式が失礼な態度で」

「構わない。恐らく死が見えたんだろう。考えてみれば、俺は特別性だからな。悪いことをした気もする。あとで謝つていたと伝えてくれ、黒桐くん」

「え？ 僕の名前……」

「ホウヅキさん、何だか式に甘くないですか？ 本当に知り合いじゃないんですか？」

「違う。そう見えるか」

「ねえ、藤乃もそう思わない？」

「はい」

私もそう思います。

「気のせいだろ」

鮮花は納得いかないという顔だけれども、先生はあまり詮索されたくないようだつた。

「兄さん、立つていなide、こつちへ座つて。橙子さん、もつとそつちへ寄つてください」

「おいおい」

「いいよ鮮花、僕は」

「いいからつ」

押し切られる形で、眼鏡の男性は鮮花の隣に座られると、先生と私を見比べた。

「あの、鬼灯さん？ と——」

「浅神藤乃です」

男性は「黒桐幹也です」と頭を下げる。隣を気にしつつ、躊躇うような間を開けてから口にした。「お二人はその、魔術師なんですか？」

「そうだ。蒼崎とは古い縁があつてね……今日は久々に日本で用があつたから、ついでに顔を見ておこうと思つたのさ」

渋々といつたように認め、蒼崎女史はこの男はいつも突拍子がないから困る、と愚痴を続ける。黒桐さんは何故か微妙な表情を浮かべていた。私は、この人の良さそうな男性が何度か鮮花の手紙に出てきた彼女のお兄さんであること、しかもその人の口から「魔術」という単語が出たことに驚きながらも、とりあえず相槌を打つだけに留めておくことにした。

「鮮花は、……驚いてないな。もしかして知つてたのか、魔術師だつて？」

「ええ。知つていました」

「もう、間違いなく橙子さんの影響ですよね、鮮花がオカルトに踏み込みつつあるのつて」

「踏み込むも何も、鮮花は——」

「橙子さんっ」

「あー、そうか。すまん、なんでもない。気にするな黒桐」

「なんですか一人して。……ところで、鮮花はどうしてここに?」

「橙子さんから連絡があつて。藤乃が日本に帰つてくる機会なんてあんまりないし、普段は手紙でのやり取りだもの、せつかくなら会いたいと思つたんです。そうしたらシスターも特別にこの時間だけ許してくれて」

「そつか、二人は友だちだつたんだね。いつも鮮花がお世話になつています」

こちらこそ、とあまり広くない空間で日本人らしく交互に頭を下げ合つたあと、黒桐さんはおずおずと手の中の小瓶を見つめた。「それでこれは、いつたい?」

「エリクシル靈薬だ。患部組織に記憶が定着する前に使用すれば、大抵の怪我はたちどころに治すことができる」

一度きりの使い捨てだが、と先生が話すと、鮮花が畠然としている一方で、黒桐さんは困惑している。

「流石にユニコーンの角には及ばないがな。エクスボーションつてところか」

「どんな怪我でも治せる? なら……」

「ああ——ちなみに言つておくが、両儀の腕を治すのは無理だ。時間が立ち過ぎていて。血が固まり切る前に使うのが理想だな」

黒桐さんの困惑がいつそ強くなつた。「えつと、何の話です? 橙子さん、もしかして式が怪我したんですか?」

「いいや。私が知る限り、あいつは靈薬に頼るような怪我なんてしていないよ。例の爆弾魔の一件でも、巫条ビルでの件でも。物理的な傷なんて負つちやいない」

今度は、先生が呆気に取られていた。口から煙を立ち上らせながら。「そうか」遅れて愉快な事実に気づいたとでもいうように、大きく肩を揺らし始める。「ああ、そうか。そりやそうだよな。藤乃がここにいるんだ、殺し合いなんざ起きるはずもない。そりやあそだ……」

先生は、あまり品の良くないわらい声を上げている。幸いにも注目を集めることはなかつたけれど、ときどき先生はこんなふうに突拍子もなくわらい出すことがあつた。わらいが収まつた後に理由を訊いても教えてくれたことはない。私の名前が不穏なワードと一緒に出たけれど、どういうことだろう。考へても分からなかつた。

それと、鮮花がかなり引いている。

「悪いな黒桐くん。俺の初歩的な勘違いだつた」

「い、いえ、それは構わないんですけど……高価なものなんですよね？」

「気にしなくていい。他にもいくつか用意はあるし、こうなるとどういうふうに事態が進行するのかは微妙だが、それでも両儀か、あるいは君にとつて必要になるはずだ。即死でなければほとんど万能な傷薬だ、有効に活用してくれ。たとえば、裂傷による失明とかな」

「即死とか失明つて。物騒ですね。予言か何かですか」

「さてね。予言ついでに、鮮花くん。一つ訊いておきたいんだが」

「なんですか」

くるぎりさつき

「君の学校に、玄霧皐月くるぎりさつきという教員はいるか？」

「……ええ、いますけど」

「そうか。ならいい」

「ホウヅキさん？」

「後になるのか先になるのかはわからないが。流れは出来ている。成るようになるしかならないってことなんだろうな。ノータツチの俺から君に言えるのは、頑張れつてことくらいか」

「どういう意味です、それ」

「さて。火種自体はすでに熾きしているはずだ。あとは探偵でもしてみるんだな」

「教えてくれるつもりはないんですね」

先生は、笑みだけを返している。

「相変わらずおまえは思わせぶりなことを言うやつだよ、鍊金術師。気を付けておくんだな鮮花。こいつがそういうことを言い出す時に限つて面倒なことが起きるんだ。いや、今の言い草だと既に起きてい

るのか？ 覚悟だけでもしておいて損はないと思うぞ」「秋も終わりだな、もう」

日陰に視線をやつた先生は、コーヒーを飲み干すと、立ち上がりつて言つた。

「例の件、頼んだぜ人形師。そうだ、もし荒耶あらやに会うことがあれば、俺が応援していたとでも伝えてくれ」

「はあ？ なぜあいつの名が」

「達者でな、黒桐兄妹」

行くぞ藤乃。万札を置いて店を出た先生を追い、「鮮花、それではまた」「……あつ、うん、手紙送るね」「はい」私は慌てて別れを告げると、街道を歩く先生の隣に並んだ。

「先生っ」息を整える。「……よかつたんですか、あれで？」

「ああ」

ゆっくりとした歩調で、私に合わせてくれている。

「なあ藤乃」

「はい」

「お前は、黒桐くんのことはどう思つた？」

「どう、と言われても。……そうですね。優しそうな方だと思いまし
た」

「好きになつたか」

「はい？」

いつたいどういう脈絡でそんな質問が出てきたのだろう。時計塔の教室の子たちじはあるまいし。

先生は私を一瞥すると、くつくつとわらい、かぶりを振つた。「なんでもない」一転して、今度は憂鬱そうな声で言う。「つまらねえことだ。忘れる」

「はい……」

先生の表情は、照り返しによる日差しが影を作つていて、私からは見えなかつた。そのことに何故だか胸騒ぎのようなものを感じていると、思いついたように先生が言つた。

「よし、パフエでも食うか」

「さつきのところで頼めばよかつたのでは？」

「煙草^{モク}やりながら甘味食つたら、味が分からなくなるだろう」

「でもコーヒーと煙草は一緒ですよね」

「それはそれ、これはこれだ」

そんなものだろうか。

「まあいい。時間もあるし、たまには羽を伸ばすぞ」

強面に反して甘党な先生の希望もあつて——もともと私に拒否権なんてものはないのだけども——この日は結局、土産店も並ぶスイーツ街道でクレープを食べ歩くことになった。

「なんだかんだで、よく食うよな、藤乃は」

「先生だつて。でも、はい。せつかくですから」

ただ、と頭の片隅で思う。鮮花が知つたら、残念がるかもしぬれない。それを言うと、先生は「なら今度は、一緒に回ればいい」と小さく笑つた。

「いいんですか？」

先生の気遣いが嬉しかつた。ロンドンだと、食べ歩きにはフイッシュュアンドチップスくらいしかないから。

普段は遠く離れている友だちと、甘味を食べ歩くのを想像する。「それって、すごく素敵なことですよね、先生」

「そうだな」

はしゃいでいる私を見つめる、先生の眼差しはいつになくやさしくて、私は不意に胸が詰まるような感じに襲われた。なんとなく、恥しいような気持がして、視線を周りにやつてしまふ。今の私たちは、周りからどんなふうに見られているのだろう？ 年の離れた兄妹？ それとも、休日に一緒に時間を過ごしている父娘？^{おやこ}

「どうした」

「ううん」

私は心配させたりしないように、精いっぱい楽しんでいることを伝えるために、笑顔を見せる。

「なんでもありません。先生？」

「なんだ」

「私、こうしていられて、とつても楽しいです」

「そうか」

先生は、眩しいものを見るように目を細めると、私から視線を外した。

「なら、来てよかつたかな」

【 3315・8 / October 1998 】

私立礼園女学院。

敷地の大部分を森のような深さの林で囲まれ、世情から遮断された都心の秘境に数少ない男性教員として勤務している魔術師は、ふと透明な鳴き声を耳にして顔を上げた。

視界の端を、青い蝶が飛んでいる。職員室には魔術師の他に事務員がいたが、その羽ばたきに気づいている様子はない。蝶は職員室の扉の前でふわふわと旋回している。魔術師は作業を中断して扉を開けてやつた。蝶は廊下に舞い出ると、軽やかに浮かびながらもその場に留まっている。魔術師が近づこうとすると、蝶はゆっくりと動き始めた。魔術師が足を止めると、蝶も進むのを止める。まるでこちらを何処かへ誘おうとしているかのように。

蝶に誘われるまま、魔術師は廊下をしばらく歩いた。生徒たちとすれ違う。こんにちわ玄霧先生。「こんにちわ■■君」蝶の存在は生徒たちには映っていないらしい。

旧校舎。

開け放たれた空き教室に、蝶は入ってゆく。机を撤去されたその部屋には椅子が一つだけ残されており、黒い小瓶が置かれていた。魔術師が教室に入ると、蝶は力を失くしたように落下する。

近づいてみれば、それは蝶などではなく、白い二枚の紙片になつていた。

（調子はどうだ、言靈使い。エイエンの探索は順調か？）

唐突に紙片が燃え上がる。炎のなかから、男の声が聞こえてきた。
焰はグラデーションを描きながら、空中にとある魔術師のスペルを

書き記すと、人の舌のかたちを模すように揺らめき蠢く。

「——そ、うか。君か」

魔術師は口角を上げ、「笑つている」とされる表情を浮かべた。

「崩月。ほうづき君のほうこそ、失くした記憶は思い出すことができたかい？」

焰が、皮肉そうに歪められる。

〈今日は、借りを返そうと思つてな。お前にプレゼントがあるんだ〉

【 3315・9 / February 1999 】

テレビを見るでもなくぼんやり眺めていると、甲高いチャイムが鳴り響いた。私は落ち着こうと努めていた心臓が、私の意志に反して本心を代弁するよう激しくなるのを感じる。

ドアスコープを覗き込むと、いつものネクタイとスーツ姿の先生が立つていて、一瞬、開けるか開けないか迷ってしまった。

「なんだ。まだ覚悟できていないのか」

こちらの及び腰に先生は半目になつて言うけれど、先生にだつて今回の一端はあると思う。

「どうする。やつぱり会わなうことにするか」

聞き分けの悪い子供を諭すような口調。私は、先生にこれ以上聞き分けの悪い娘だと思われたくない、訥々と浮かんでくるエクスキューズの口紐を縛ると、レンタカーの助手席に乗り込んだ。

「今からそんなに緊張していくどうするよ」

滑り出したセダンに揺られながら、見かねたように差し出されたキヤンディを口のなかで転がしつつ、私はこんなことになつている緯を思い返す。

前回から半年と立たずに日本を訪れることになり、私は普段のように先生に同行したのだけども、ホテルで荷を解いたあと、レストランで夕食を取りながら先生が爆弾発言を放つたのが、今から五日前の話で。

——「お前に会いたがっている人物がいる。お前が望むのなら、会わせてやつてもいい」

その内容というのが、まったく私には想像の外のものだつたから、私は大いに悩まされてその日から眠れない夜を過ごすことになつた。どうしてこのタイミングで言い出すの、と少し恨みがましくさえ思つ

たものの、時間をかけて悩み続けて、でも私のなかに会えるものなら会いたいという想いがあるのも事実だったから、思い切って先生に打ち明けたのが、二日前のお昼頃のことだつた。

——「先方に伝えた。明後日にも会えるそうだ」

それでもまさか、だからと言つて本当にこんなにすぐに会うことになるだなんて、知らされた時まで考えもしていなかつたのだけど。「魔術師は容易く心を乱さない。そうだろう」運転席に座る、落ち着けない理由の遠因であるその人が言つた。「成長した姿を見せなくともいいのか」

先生から学んだ一番最初の教え。「どんな状況でも平静を見失わないこと」。先生の言うように、今の状態では己の未熟を相手に知らせるようなものだつた。本当に久しぶりに——もう会うこともできなと思つていた相手に——会えるというのに、こんな自分の姿を見せるのでだけは、避けなくてはならない。

口のなかのキヤンディは、いつの間にか溶けてなくなつていた。私は手の平に「人」という字を三度なぞり、それを呑み込むように深呼吸をした。知らない人にとつては迷信にしか映らない行為も、きちんととした理解があればそれは呪の意味に代わる。人間の掌にある気を鎮めるツボと、生物にとつて欠かせない「呼吸」を合わせた簡単な「呪」。私は何度も繰り返すうちに、躰の芯にあつた火照りにも似た高ぶりが薄らいでゆくのを感じる。そしてその認識を血管の流れと同期させながら、全身へゆつくり、範囲を広げてゆく。

「それでいい」

私は聞こえるだけで耳に入らなかつたラジオの内容がきちんと意味まで聞き取れるようになつていて、気が付くと、意識的に肩から力を抜いた。

「先生」

「なんだ」

「チャンネル、変えてもいいですか?」

先生が苦笑しながら顎をしゃくつたので、私は幾つかの番組を流すこととした。映画のサントラを放送しているところがあつたので、そ

こに決める。聞き覚えのある、ゆるくてゆつたりした音楽は、暫らく

すると交感神経の興奮をリラックスさせて、私の気分も前向きにしてくれる。たとえ渋滞で、さつきからちつとも進んでいなくとも。

曲が変わった。ピアノ。声質ですぐにわかる。ビリー・ジョエル。

「……ウィーンって、どんな場所なんでしょう」

「オーストリアだ。芸術に富んだ、いい街だったな。バロック様式の大図書館だつたり、美術館だつたり。歌劇場も有名か。宮殿とかもある。市の中央にはシユテファン寺院とかな。それに、サウンド・オブ・ミュージックの舞台もある」

「見たことないです」

「本当かつ？ ジュリー・アンドリュースだぞ」

びっくりしている先生が、おかしかった。

「今度、見てみろよ。いい映画だから。そのうち——」

クラクション。だいぶ前のほうから響き渡つた。車が流れ出す。何かを言いかけた先生は、口元に笑みを浮かべていて、私は言葉にできない予感を覚えてしまう。善い予感、悪い予感かもわからない。ただふとしたときに、彼のこんな表情を見ることが増えたような気がする。

「先生？」

「いいや。なんでもない」

また、曲が変わった。今度は私の知らない曲に。

「藤乃

「はい」

「あまり気負わないことだ。向こうも同じだろうから、二人してそんな調子だとろくに話せないぞ」

車が左折する。

不意に、やさしい声が聞こえた。

「その服、よく似合つてる」

「——」

「きっと驚くだろうな。久しぶりに会うお前は、記憶よりもずっと綺麗になつているんだから」

私が驚かされています、先生。それも今、ここで。

「……、」

昨日、お店で選んでいた時には、何も言つてくれなかつたのに。なぜだろう。私はなんだか急に、隣を見ることができなくなつてしまつたみたいだつた。むず痒いような感じが背中の辺りをくすぐつていて、顔もそうだし、躰もどこからか湧いてきたみたいに、さつきよりもずっと火照つている。せつかく整えたはずの鼓動も、大きくなつて私に何かを訴えかけている。

——そうだ。

——たぶん私、先生に、初めて綺麗つて言われたんだ。

「大丈夫だ。お前なら」

おずおずと視線を上げると、先生と目が合つた。

思わず顔を伏せてしまう。こうなると今の私は、このまま俯き続けるか寝たふりをするかの二択しか選べそうになかつた。窓のほうを向く。建設途中らしい、とても大きな海上橋が見える。ちょっと悔しいけども、それ以上に緩んでしまいそうになる口元を必死に堪えながら、私は瞼を閉じた。やつぱり、この人は意地悪だと思いつつ。

「ついたぞ」

セダンは、駅のロータリーに停車した。寝たふりを開始して五分も経つていらない気がする。私は自分でもわざとらしいと自覚しながら、身体を伸ばし、あくびを手で隠した。

「よく眠つてたな」

私は意地になつて「はい」とにつこり返すと、鞄を肩に提げて、地面に降り立つた。

周辺を見回す。平日の昼前で人も多いため、簡単には見つかりそうもない。

「あそこだ」

「えつ」

車道側に降りた先生が、一か所を示した。

そこには――

同じように気づいたらしいその人が、驚いたような顔をして立つて

いた。私は鼓動が早まり、また緊張がぶり返してきたのを感じる。あの人気が、本当にそうなのだろうか。期待と、不安。直感はそう言つて、「あの人だ」と。あの人気が、こちらに近づいてきている。眩いような笑顔だった。私は、きちんと話すことができるだろうか。

私は、私に向かつてくるその人のことを見つめた。その人も、じつと私だけを見ている。たくさんの人々の群れの中で、私たちはお互を真つ直ぐに認め合つていた。

こんにちわ。そう言つて私の前に立つた彼女は、私よりも背が高くて、私よりもずっときれいで、それに懐かしくて。

「藤乃」

先生の声。

「頑張れよ」

振り向くと、車は既に発進してしまってころだつた。迷路のような道路を走り、すぐにセダンは見えなくなる。

「お久しぶりです。お母さま」

久しぶりね、藤乃。元気だつた？ 抱きしめられる。香水の香りだろうか。すぐ近くで見つめ合つた顔は、昔は分からなかつた化粧が薄らとされていて、けれどもその笑みは、記憶のなかの彼女と変わらないままだつた。

「——はい」

私は、母と九年ぶりに再会を果たすことになつた。

【 3315. 10 / February 1999 】

工業地帯の中央近辺に立つ、工事段階で途中放棄された廃ビルのような建物が〈協会〉から「冠位」と「赤」を授けられた魔術師の秘密工房であることを知る人間は少ない。一階は車庫で四階は〈伽藍の堂〉事務所、間の階については唯一の従業員である黒桐幹也も、また魔術師の弟子である黒桐鮮花も知らずにいる。

安置所^{モルグ}のように寒々しいビルの不明階層にて、魔術師の女は大勢の肢体に囮まれながら立つていた。

「これか」

一人ではない。シルバーのスチールテーブルに横たえられた作品の前で声を発したのは男であり、続けて「よくできている」と感嘆の意が漏らされる様子を、女は特に興味のない顔で眺めている。

男は鏡と向かい合うようにしながら、己と瓜二つの「人形」を観察している。

それは人間が擬態していると言われば信じてしまう程には真実味があり、水平に寝かされている様子は生きたまま命を停止させたかのようだ、だからこそ死体とは異なり、魂を入れさえすれば容易く息を吹き返すであろう姿を見る側に想像させる仕上がりとなっている。そしてその想像は、同時に事実でもあった。既存の科学技術では未だに到達し得ない神秘の結晶が男の前に存在していたが、しかし制作者である女にとつては、さして驚くほどのことでもない。

「確認した。たしかに、これは俺の求めていたものだ。——蒼崎、まずは礼を言つておこう。それと少し、頼みがあるんだが」

「なんだ。礼ならいらんぞ、おまえが頼みなどと言い出すと厄介ごとの予感しかしないが、聞くだけならば聞いてやる」

「これを、しばらく保管しておいてもらいたい」

「私を倉庫屋と勘違いしているのか。自分のとこのコンテナにでも置いておけばいいだろ」

「長くとも一週間だ。そのぶんも追加で払う」

「何を始める気だ」

「さてね」

「何かを始めるのは、確かだろう

「かもな」

女は嘆息し、手近な椅子に腰を下ろすと、推測を立てたんだが、と言ひ放つた。「おまえが始めようとしていることに関して。当ててやろうか」

男はわらつてゐる。「言つてみろ。非常勤講師の俺が採点してや

る」

「思いついたのはこの間なんだがね。……時計塔にいた頃からおまえ

は、〈根源〉へさほどの興味を抱いていなかつた。そうだな？」

「どうかな」

「真つ当な——なんて表現を私がすることがそもそもオカシイが——魔術師であれば〈根源〉への到達を至上の命題とすることは、生物が生きるのに酸素を必要とするくらい当たり前の常識だ。だがホウヅキという古い退魔の一族であるおまえが研鑽し求めていたのは古今東西の再生と破壊の魔術ばかりで、おまえの思想は魔術師というよりもむしろ、魔術使いのそれに近いと私は思つていた。……そしてこの間、鮮花がおまえに質問していたな、なぜ日本に帰つてきたのかと。おまえはこう返した、悲願を達する機会^{とき}が近づいたからだ、とな」

——「魔術師として、何を望むんだい？」

「真理への興味がないおまえが言う悲願とは何を示しているのか。ずっと昔に聞いたことがある気がしてね。懐かしい記憶だよ。あの場には私と、おまえと、荒耶もいたな。師の問いに私が答え、荒耶が続き、そしておまえが言つた。おまえの口から悲願という言葉を聞いたのはそのときだ。おまえは言つた、ワタシは月からやつてきた死徒を墜^{ころ}すためにいるのだと。その達成こそが何よりも一族の悲願であると」

いつたん言葉を切つた女は、証拠を突き付けられた犯人に迫る刑事のように男を見つめた。

「よく覚えていたな」男の反応は、驚きというよりも、呆れを含んだ苦笑だつた。「そうとう古い記憶だぞ。俺の失敗のうちの一つだ、大勢の前で腹の内を明かすなど。若かつたんだな」

鼻を鳴らし、それで、と男は続きを促す。

「俺の失敗談を話して、昔を懐かしみたいわけじやないだろう。結論を言え」

「まあな。といつてもそれだけのことで、あとは簡単な組み立てだつた。おまえが躰を受け取りに来たということから、つまり最後の準備が整つたのだろうという答えに至つたわけだ。で、どうだ、当たりか？」

男は、小さく噴き出すように笑い声をあげた。

「正解だ」

女はどことなく身構えるような気分になりながら、男の話に耳を傾ける。

「ある目的を遂げるために、崩月は生み出された。正確には、崩月たちは、だが」

「その目的が、死徒を殺すこと?」

「そうだ。ただの血吸虫じゃない、月からやつてきた不死身の王様を墜す。そのために、崩月たちは何一〇〇年もずっと腕を磨き続けてきた。馬鹿みたいにな」

「それが本当だとして。珍しいな。いつもはだんまりか誤魔化すのに、今日はやけに素直だ。どういう氣の変わりようだ?」

「俺にだつて、たまにはそんな日もある」

「おまえ、明日になつたら死ぬつもりか?」

「かもな」

「……靈墓^{アルビオン}を生還し、死徒狂いとまで言われたおまえが、死を覚悟するほどの相手というわけか」

「ああ。これまで戦つてきた相手とは規模^{ケタ}が違う、なんせ単騎で地球を滅ぼせる化け物だからな。可能な限り準備はしたつもりだ。知り合いで動かせる代行者や、バルトメロイにも利権と引き換えに大隊を要請したが、それでも。ここまであてにできるか」

「ヘクロンの大隊」か。驚いたな。素直なことに加えて、いつになく口

が軽い。今なら、訊けばなんでも答えてくれそうだ

「いいぞ。今の俺は気分がいい。何が知りたい?」

「ならたとえば、その吸血鬼は、本当に月からやつてきたのか?」

「元々はそうだった。かつて支配していた月が

なんにも無くなってしまったとかで、この星と取引をして世界に降り立つたあと、喧嘩を売つてきた魔法使いによつて殺されたが。今はどこかの城のなかで、復活を待ちながら夢でも見てるんだろうよ」「どういうやつなんだ、そいつは」

「すべての死徒の原点だ」^{オリジン}。殺されたと言つても、未だに存在し続けている。そして目覚めれば、世界中の死徒を同時に相手取つたとして

も、簡単に勝つだろうな

「俄かには信じ難いが、ひとまず眞実であるとしよう。おまえの一族はそんなやつ相手にこれまで何度も挑んできたということか。訊いた私が言うのもなんだが、一族の秘蔵じやないのか」

「いいや、一族とは関係ない。たぶん、これは俺自身の知識だ」「多分だつて？」

「自信がない。どこまでが俺で、どこからがそうじやないのか……意味のない悩みだが」

男は静かに話しながら、人形に手を伸ばした。

「——おい」

女は目を見張りながら、男の触れた人形に近づく。

人形の首に、あざのようなものが現れていた。黒い、はつきりと輪のようなく喉を一周しているあざ。それは今この瞬間まで存在していなかつたはずのものであり、まるで何かの手品のように、どう考えても今この瞬間に浮かび上がつたとしか思えないあざだつた。

「何をした？」

「何も」

男は現れたばかりのあざをなぞると、陰鬱そうに顔を歪めた。「知つていた。ああ予想通りだよ、ちくしょうめ……期待はしないと決めていたはずなのにな。婆さんからも聞かされていたのに。いざ前にしてみると、なかなかに、堪こたえる」

女が物言いたげな視線を送り続けていると、男は気怠げにネクタイに指をかけた。

「聞いたことくらい、あるだろう」

ボタンが外され、喉元が露わになる。

「誰しも呼ばれたくない名前つてのはある。呼ばれたくはないが知らないうちに有名になつていてる蔑称。蒼崎橙子にとつて『赤色』がそうであるように、俺にも許さないと決めたものが一つある。お前だって、聞いたことくらいはあるはずだ」

男の首には、礼装と思しき包帯が巻かれていた。慣れた手つきでそれも外されると、女の視線は、現れた男の喉元に吸い寄せられていた。

荒れ果てた肌。剥がれ落ち、疫病のように斑点の散りばめられた変色皮膚。そしてひときわ目立つ、真っ黒なあざがある。

人形のそれと同じように男の喉を一周して、まるで首輪のように繋がっていた。

そのあざを見て、魔術師は自身の双眸に映るモノに息を呑んだ。

——蛇。

黒い、あざのようにも見える長い蛇が、男の喉元で、自らの尾に喰らいついて円となりながら、まるで生きているかのように蠢いている。

「これは……」

「本音を言うとだ。悲願なんてのは、俺にとつてはどうだつていいんだよ」

だが、と男はわらいながら言つた。包帯をつけ、ネクタイを締め直しながら。

「逃げることはできない、これがあるからな。逃げられないなら逃げられないなりに、もつと時間をかけて準備をしたかつたつていうのに、俺にはその時間すらも与えてくれないらしい。悠長にしていて、俺にはその時間すらも与えてくれないらしい。悠長にしていて」と、怒つたこいつらが俺を内側から食い殺しちまいかねないんだ

今朝だつてこいつらの鳴き声で目が覚めたくらいでね。おかげで〈煙薬〉が手放せない。今だつて四六時中やつてるつてのに、これ以上増やしたら汗まで薄荷臭くなりそうだ。

——

女は普段ならば「爽やかになつていいやないか」と返したであろう軽口も忘れて、人形に現れた黒いあざのような、何の魔力も感じ取れない蛇の像に触れながら、思考を重ねる。

「おまえが接触した途端、人形こつちにも現れたということは」

「魂を移し替えたところで逃げられはしないってことを、丁寧に教えてくれてるってわけだ」

「……此処に在ることは見えているのに、何の感知にも引っかかるん。影絵のようなもの、が一番しつくりくるか？ 瘢だな、精神干渉を受けていないのだけは確かだ。それだけはつきりしている。まつた

く、自分の作品に訳の分からんものが憑り付いているなど業腹でしか
ないが。いつからそうなんだ、おまえ？」

「最初からだ。生まれたときから」

「解く方法は」

「言うまでもないだろう。だからこそ、悲願なんだぜ」

愉快そうに言つた。なぜ笑えるのかが女にはわからない。あるいはもう、この男は投げてしまつてゐるのか。

「……直死の魔眼ならば」

すぐに、かぶりが振られた。それは無理なのだと。何がしかの繫がりを持つ二重存在ならばともかく、水面に映つた月を斬つたところで、月そのものを消し去ることはできないのと同じであると。

「仮にできたとしても、そうなる前にこいつが宿主を見逃すと思うか」「それもそうか。だが転移……いや……増殖したとなると、この身体を作る意味はあつたのか？」

「まあ、こうなつた結果はどうかく、出来栄えに関しては俺は満足している。それだけで十分、と思うことにするさ」

両者の間に、沈黙が降りる。

「長くとも一週間か」

「保管、頼めるか」

「ここまで聞き出した手前、断れんだろう。今回だけだ」

「次はないと思うけどな。恩に着る」

「おまえの弟子も、連れて行くのか」

男の表情が、わずかに揺らぎかけた。すぐに胡散臭い笑みに取り繕われる。

「そういうえば、玄霧皐月はどうなつた？」

「……礼園から姿を消した。死体は見つかっていないそうだ」

「そうか。なら、いい。あいつにくれてやつたものだからな。どう使おうが、あいつの自由だ」

呟くように言うと、男は改めて女のほうを向いた。

「最後だ。お前には、話しておこうと思う」

「なんだ」

「名前だ。——俺たちの、本来の名前」

「崩月じゃないのか」

「違う」

鬼を灯す——鬼灯ではない。

月を崩す——崩月でもない。

「両儀と似たようなものだ。ただ、五代前の当主が変えたらしい。俺はその理由を、恥辱の原点を、忘れないようにと教えられた」

男は、それを語った。

女はその意味を知り、魔術師として未熟だと知りながらも、目の前の呪われた血族を憐れむような気持になるのを感じた。

「皮肉だな。まるで運命を仕組まれたような……いや、魔術師が容易く運命などと言うべきではないか」

「どちらでもいい。それを突き崩すために、俺はいる」
じやあな。

「待て」

女は、思わず呼び掛けていた。

「なぜ、私に教えた?」

男は脚を止めると、振り返りざまに口元をほころばせた。

「今度、会つたときにな」

女はしばらく立ち尽くしてから、無意識に懐から取り出した煙草をくわえた。火を点けようという寸前で作業場を禁煙にしていることを思い出すと、一度だけ人形に目をやり、明かりを落とす。

主人の立ち去った部屋には、無数の肢体だけが残されている。

【 3315. 11 / February 1999 】

空は晴れている。ビルの隙間から窺える雲の塊が、ゆつたりと見える速度で流れている。

信号を待つ人たちが、変わったとともに動き始めている。行きましょう。私を抱きしめる、きれいな大人の女性が言った。先生の弟子となつて以来、およそ九年ぶりに再会した母親が。

私たちは着かず離れずの間隔をあけながら、音の洪水へと歩き出しうゆく。私たちの距離は、お互いの期待と不安の物差しでもあつた。

藤乃はこの街のことはどうくらい知っているの？ 母が訊いてくる。私は、ほとんど知らないと答える。日本で過ごすことはあまりない。生活拠点はロンドンだから。それを使うと、母はイギリスで暮らしているの、すごいわね、と朗らかに笑つた。私はね、今はここで暮らしているのよ。そうだ、近くに雰囲気の好いカフェがあるの。これから歩いて少しのところね。

ロンドンだと何をしているの？ それを訊かれると少し困る。私は言葉を選びながら慎重に答える。「学校に通っています」。どこの学校？ 「あまり有名なところではないですけど。大学も一緒になっていて」。すごいじゃない！ もし母がケンブリッジやオックスフォードを想像しているとしたら、少し気まずい。どんな勉強をするの？ なかなかに難しい質問だつた。「色々」としか答えられない、「民俗学とか、考古学とかを」。お友達はできた？ 私は幾人かの顔を思い浮かべた。「はい」。どんな子たち？ これも難しい質問。とても奔放で賑やかな男の子、獸性魔術を遣う賢くて紳士的な少年、公然とロード・エルメロイⅠⅡ世に好意を寄せる女子、義兄をサディスティックにからかうのが好きな女の子など。私の周りの人たちはみんな何かしら変だから——もちろん私も含めて——素直に話すのに

も限度がある。

ごめんなさい、質問詰めにしちゃつたわね。母が苦笑している。いいんです、と私はかぶりを振った。せっかくこうしていられるのに、何も喋らないで時間がだけが過ぎてゆくほうが悲しいから。でも私は弁舌にあまり自信がないし、質問されて答えるやり方のほうが、こちらとしても気持ちが楽だった。

じゃあ今度は藤乃の番ね。質問はある？ 何でも訊いていいのよ。届託ない様子で、母が言つてくる。私は目の前の彼女に、不思議な印象を抱いていた。記憶のなかの母は、もつと言葉数少なかつたはずで、果たしてこんなに明るく笑えるような人だつただろうか。

「この街に住んでいるんですか？」

三年前からね。お父さんることは覚えてる？ どう答えるべきか迷つていると、母はセンセーショナルなことを告げた。お父さんね、三年前に亡くなつたの。そのときに色々と思うことがあって、あの街から出ることになつて。こつちに会社を作つたのよ。

つまり、社長ということになるのだろうか。もう曖気にしか覚えてない父のことも驚きだけど、私のなかでキャリアスーツを着ている女性社長のイメージと母の姿はまったく重ならなかつた。疑つているわけじやない。何もかもがびつくりで、しかしそれはある意味では当然のこととも言えた。

私たちの間には、九年という時間が生んだ溝が紛れもなく存在していた。今は手探りで溝の深さを測つているような段階だから、親子としては不自然な緊張があることを、きっと母も感じている。でも、仲良くしたいという想いでは一致しているはずだと思った。

「母さま。覚えてますか」

だからこそ、私には触れなければならないことがある。それだけは決して、無視して進めることができない重要な問題がある。

この人は〈魔術〉について、どこまで理解しているのだろう？
「私の、異能ちからについて」

視線を感じる。口のなかが渇いているのを感じる。

母が頷いた。寂寥を帶びたような眼差しで。ええ、忘れたことはな

いわ。あなたを苦しめていた理由、私たちが追い詰めてしまつた原因だもの。

「私、この力を正しく使えるようになるために勉強しているんです。嘘だと思うかもしれないんですけど、……魔術を」

言いながら、怒られるかもしれない、と私は思った。もしくは、冗談だと笑われるかもしれない。

母の反応は、そのどちらでもなかつた。本当なのね。驚くでもなく、呟くように言う。あの人の言つていたとおりなのね。

「あの人？」

母は、先生の名前を口にした。どうも、ある程度の説明は事前に受けているらしい。浅神あさがみは崩月ほうづきと同様に退魔の家系として日本の「裏」の一部には知られているため、魔術という非常識の実在を信じる下地は始めからあつたということなのだろう。

訊かせてくれる？ 母が言つた。今日まであなたがどんなことをしてきたのかを。私は頷いた。「母さま。訊いてくださいますか」

――

私は語り出した。すべてのきっかけである〈魔術〉について、触れずとも話すことはできただろうけれど、それでも私は母に伝えたかったから。私のことを、もつと知つてほしいと思つたから。

【 3315・12 / February 1999 】

女の子が泣いていた。

「どうしたの？」

私たちは母のイチオシだというカフェでランチを取つたあと、服屋やアクセサリーショップが軒を連ねる表通りを歩いていた。その子に気づいたのは、母に連れられて相当な数のお店を回つた後のことだ。

母に断つてから、近づいた。小学生の低学年くらいに見える。しゃがんで目線を合わせ、怖がらせないように訊いた。「どうして泣いているの？」

女の子は充血した目で、時おり肩を震わせながら要領を得ない言葉で話す。どうやらお母さんとはぐれてしまつたらしかつた。気づいてすぐに見つけようと探しingいたら、いつの間にか此処がどこなのかなからなくなつてしまつたのだと言う。

「母さま」

すかさず、近くに交番があるはずだと教えてくれた。それも方法の一つではあるだろうけれど、今の私には別の手段があつた。魔術師の私にしかできない解決策。私は母に待つてもらうと、女の子に幾つかの質問をした。

名前、年齢、恰好などを訊き出すと、私は懐から一枚の紙片を抜き取り、頂点が一つに繋がつた二つの三角形を折り出した。唇に触れさせながら、先生から教わつた「呪」まじないをそれへ吹き込む。次いで紙片を両手で挟むように覆い隠すと、女の子にお母さんのことを思い浮かべるよう言つた。

「思い浮かんだ?」

私は紙片の入つている掌を女の子の前に出すと、蓋をしていた親指をずらし、小さな隙間を一つだけ作る。「お母さんのことを考えながら、ゆっくり息を吹き込んでみて」

女の子は戸惑いながらも、私の指示に従つた。生暖かい風が送り込まれる。私は口のなかで連動する「呪」を唱えながら、女の子が息を吐き切るのを待ち、吐き切ると同時に再び蓋をした。

藤乃? 母が言う。お姉ちゃん? 女の子も言う。私は答えなかつた。瞼を閉ざし、「呪」を練り上げることに集中する。
密閉された掌の「匣」に手応えが生じると、私は静かに「匣」の封を開いた。

ふわり、と。

重力を無視して、蝶が舞い上がる。

すごい! 女の子が声を上げた。真っ白な蝶が、ひらひらと女の子の鼻先を飛んでいる。母も驚いていた。どうしたのよ、これ?
「ちよつとした魔術です。さ、行きましょう。この子が、お母さんとのここまで案内してくれますから……」

羽化したばかりで少し頼りない飛び方ではあつたけれど、蝶は迷うことなく進んで行く。私たちが案内されて向かつた先は、デパートだつた。サービスカウンターに辿り着くと、女の子が急に走り出した。業務員に話しかけていた若い女の人に抱き着く。女人人は女子を抱きしめ返すと、どこに行つてたの、と怒り出した。

「よかつたです。無事に見つかって」

ありがとう、魔法使いのお姉ちゃん！ 女の子のお母さんは私たちに何度も頭を下げる、しつかり手を繋いで去つていつた。私は胸を撫で下ろしながら、ただの紙片に戻つてしまつていた蝶を回収した。付き合わせてしまつた母に謝ろうと振り返ると、気にしていない、どうせなら私たちも繋いで歩こうか、と茶化しめいた口調で手が差し出された。

私は一瞬、躊躇つてしまう。母はすぐに冗談だと笑い、私の背中を押した。行きましょう？ 並びながら歩き出す。外へ。手は組なまないます。

藤乃。やわらかい声をして、母が言つた。大きくなつたのね。

私は面映ゆい気分になりながら、おずおずと母の手に触れた。そつと、母が握り返してくる。訳もなく顔が綻ぶのを感じながら、私たちは街の様々な場所を歩き回つた。

いつの間にか、夜もすっかり深まつていて。

母に連れられて、私はフランス料理のレストランに入った。ディナーに誘われたときは先生に連絡を取るべきか迷つたものの、既に許可は取つていたらしい。母が食前酒にマディラワインを選び、私は未成年なのでミネラルウォーターを頼むことにした。

此処のお店はテーブルマナーに堅苦しい場所じやないからと母が最初に言つていたけれど、一通りのマナーはアムネヒルダに教え込まれているから問題はなかつた。むしろそつなくナイフとフォークを遣う私に、母はすっかり感興を向けてくるから、逆にこそばゆいくらいだつた。

「——先生ですか？」

私の日常や母の仕事の話題から巡り、やがて今度は先生の話になつ

た。グラスを置いた母は、ふちに付着した口紅を指先でなぞると、不意に思い馳せるように、不老の魔術つてあるのかしらね、と呟いた。

「不老、ですか」

不老。不死。それは、歴史上多くの人間が追い求めた理想ヨメでもある。御伽噺に語られる伝承が時として魔術史における事実であるよう、不老不死もまた存在しないはずはない——現に、死徒がそれに近いとされているし——謎の多い先生であれば、もしかすると色々と知っているかもしれない。でも、どうして急に母はそんなことを言つたのだろう。

あの人は変わらないままだつた。私はこの一〇年で、自分の躰に老いを感じることがだんだん増えてきたわ。老いることを否定しているわけじやないの。だつて、それは私が生きてきたということじやない？ でもあの人は変わつていなかつた。あの人は……まるで初めて会つたあの時から、時間が止まつてゐるみたいだつたわ。あの男は、まるで――

母が私を見る。私は射竦められたように、心の奥底が固くなるのを感じた。すると、母の目尻の皺が緩んだ。でも、と口が開かれる。あなたの話を聞いていると、もしかしたら違うのかもしれない。彼は、私の思うような人ではないのかもしれない。なんとなくそう思つたわ。あなたと会うことを許してくれたし、諦めていたチャンスも与えてくれた。彼にそんな義理はないはずなのに。

——チャンス？

藤乃。あなたは、あの人からどういうふうに聞いてたの？

——どうつて。

彼はね。私に、チャンスをくれたの。本当なら、あの男にあなたを差し出してしまつた私にこんなことを言う資格はないのかもしれない。だけど、彼はあなたがそれを望むのなら、許してもいいと言つたわ。

——何を。

何を言おうとしているのだろう、この人は。得体の知れない予感が、不気味に背筋を這つてくる。母の静かな気勢に呑まれ、私

の指先は無意識にテープルクロスを握っていた。

藤乃。

もう一度、私と一緒に暮らさない？

「——」

時間が、止まつたような気がした。それは当然ながら私の気のせいであつて、他の客たちのナイフを動かす音やお喋りの声は消えていない。

消えてしまつたように小さくなつたのは、私の裡で弾んでいた感情だけだつた。

「どういう、ことですか」

今さらつて、あなたは思うかもしれない。だけど、あなたは私の大切な娘なの。今も。昔も。あなたがいなくなつて、あなたのおかげで入つたお金で、確かに浅神の家を残すことはできたわ。でも、後悔しない日は一日だつてなかつた。

母は、私から視線を逸らさなかつた。私は母に見据えられながら、まったく予想もしていなかつた、ほとんど不意打ちのようこの展開に、なんとか動搖を悟られまいとするので精一杯だつた。

「せ、先生は」

色々なことが、あまりにもいきなり過ぎていて。声が引き攣つてしまつた。怯えのようなものが生まれていて。母のやさしげな双眸に、今はどんな〈魔眼〉よりも恐ろしいものを感じてしまう。

「……あの人があずありません」

居心地の悪さが、お腹からせり上がりつてくるようだつた。それを、私は我慢する。私が感じていることを母に気づかせるわけにはいかないから。

許可は貰つてあるの。

今日から七日間、一緒に過ごしてみて、そのうえであなたが私を認めてくれるなら、あの男はあなたの権利を放棄すると誓つてくれたわ。

甲高い音が響いた。ワイングラスが碎け散り、中身が床に広がつて
いる。母が慌てて怪我していないかと訊いてくる。私は自分の服に
跳ねた染みを呆然と眺めながら、母の言葉を反芻している。
驚かせちゃったわね。ごめんなさい、急かすつもりはないの。すぐ
に答えをもらえるとは思っていないから。

駆け寄ってきたウエイターが謝罪しながらガラスを処理する一方、
母は私を気遣うように笑みを浮かべた。よくわかっているとでも言
いたげに。期待を隠しきれていらない眼差しと共に。

あなたはもう、あなたの異能ちからをちゃんと使いこなせてているって聞い
ているわ。普通の生活に戻るには何の支障もないって。これから一
週間、時間はまだあるけれど……よく考えておいてほしいの。どうす
るのがあなたにとって一番なのかを。お金のことなら心配しないで。
お母さん、これでもそそこ稼ぎのある社長なのよ。

かろうじて動く思考で、私は何とか母の言葉を呑み込もうとしてい
た。母と一緒に暫らく暮らすことになるといふことも、母が私を引き
取ろうと考えているといふことも。私は初めて知る情報の密度のせ
いで、今にもめまいがしてきそうだつた。

「母さまは」

なあに？

「いつから、先生と？」

ほんのつい最近ね。

あの人がこの話を持ち掛けってきたときから。

「……うそ」

私のなかで膨らみつつあったある予感は、どんどん私から暖かいも
のを奪つてゆく。もう、楽しいという感情は残っていない。今や頭を
占めているのは、一つのことだけだつた。

——先生が、私に嘘を吐いていたということ？

藤乃？ あなた、だいじょうぶ？

先生が、私に嘘を吐く理由はなんだろうか。暑くもなければ寒くも
ない、なのに呼吸が乱れていた。自分によく知る景色とそつくりな別
の場所で目が覚めたような、奇妙な気分だった。私は今、どこに立つ

ているのだろう？ 果たしてどの現実の上に立っているのだろう？

「ごめんなさい。お手洗いに」

何か言いかけた母を断つて、私は鞄を手に、化粧台の前に立つた。鏡には、真っ青な自分が映っている。持たされている携帯を取り出し、強張った指先で番号を押した。

——まさか。

ある予感。こうしていても、依然と渦巻いている。それを、信じるわけにはいかなかつた。信じたくない、という気持ちで私は窒息しそうになりながら、呼び出し音に耳を澄ませた。

——だつて、私と先生は約束したのだから。

あの日、先生に五〇億で買われて、私は先生の弟子になつたのだから。

私は先生に必要とされていたはずだ。私は先生の役に立てていたはずだ。

先生が私たちの契約^{やくせく}を手放すだなんて。

そんなこと、ありえるはずが——

鳴り響いている。心臓が締め付けられているみたいだつた。声が聞きたい。先生の声。慣れ親しんだ彼の声を。「お前の勘違いだ」。「俺がお前を手放すはずないだろう」。待ち続けた。「馬鹿」。そう言つてほしかつた。そう言つてくれるだけで私は、必ず自分がどこに立つてゐるのか思い出せるはずだつた。

おかげになつた電話番号をお呼びしましたが、お出になりません。

私は、レストランを飛び出した。

3315 /// 207279 /

【 3315. 13 / February 1999 】

しんしんと雨が降つてゐる。

タクシーを止めた私は、行き先にホテルの名前を告げた。到着するやお釣りも受け取らず、飛び込んだエレベータのなかで、私は乱れた髪と呼吸を整えようと努める。

エレベータが止まつた。

廊下に出る。私の泊まつている部屋の一つ隣。チャイムを押した。

「先生」

反応は無い。鍵がかかっている。中にはいないのか。躊躇つてい
る暇はなかつた。私は〈チャンネル〉を切り替える。〈千里眼〉。^{（クレアボイアンス）}一瞬だつた。部屋には誰の姿もない。

なら、私の部屋は。開けて入ると、ベッドに封筒を見つけた。筆記体で綴られた「急な用事ができた」「暫らくお別れだ」「母親と仲良くしろよ」の簡素な文字列。

——まさか。

最初から、そういうつもりだつたのだろうか。
現実が歪んで見える。力が抜けて、立つていられなくなる。予感。

重たげにとぐろを巻いている。だけど、座り込んではいられない。エントランスホールに駆け降りた。目についたフロントマンに話しかけ、先生の泊まつている部屋番号を調べてもらう。つい先ほどチェックアウトなさつておりますね。

〔〕

街に繰り出した。光の洪水のなかを、人にぶつからないように走つた。

傘は差さなかつた。そんなことは、頭から抜け落ちていた。
——どこに行かれたんですか、先生。

中心街に立つ。探す方法は一つしかない。意識の「チャンネル」を切り替える。「歪曲」ならざる私の異能を、全力で行使する。

軒を連ねる高層建築群

迷路のように曲がりくねつた混凝土道路

溢れる人たちの無数の色彩と影

——それら街の俯瞰風景。

「千里眼」による膨大な情報量に、脳がとろけそうになる。脚が、崩れそうになりながら。

でも、まだだ。

もう一度。

「つ……、

街の全貌を、視界下に収めた。口のなかで、水と鉄の味が混じつている。鼻から血が流れていた。指先で拭う。

読み取った地形図を私の意識が認識しきれずとも、別に構わなかつた。「魔力針」は持ち合わせていないけれど、人を探す術はある。昼間の女の子のときのように。見も知らぬ他人ならばともかく、今回はましてや、私の先生であるならば。

「匣」を「願い」で満たし、「呪」には「祈り」を込める。

羽化した蝶が、私の掌から飛び立つた。

——お願い、先生を探して。

ひらひらと飛んでゆく。白い息が視界を霞ませ、私は躰から体温が奪われてゆくのを感じる。蝶の後をやみくもに追いかける私は、だから声をかけられたのにも、気が付かなかつた。

「アンタ」

黒いローブを着た、女人だった。恰幅がよく、五〇代は過ぎている。手を掴まれていた。引き留められた私以上に、その女人人はびっくりするような表情をしていた。「放してください」そう頼んでも、私の手を、まじまじと覗き込んでいた。「放してくれないなら――」

「そうか、あの男の。やめておきな、嬢ちゃん。アンタそつちに行くと、死ぬことになるよ」

「……なにを」

刃で衝かれるような衝撃があつた。目元が熱くなる。不快感のあまり、〈魔眼〉を開きそうになる。

「なにをつ」言つてるの、この人は。

「ここで引き返さないと、アンタはもう取り返しがつかない。今ならまだ間に合う……」

振りほどき、私は走つた。悪夢から逃れるように。邪魔されている間に遠くへ行つてしまつた蝶を何とか見失わないよう、目印にして。やがて蝶に導かれ、私は工業地帯へと辿り着いた。建築を途中で放棄されたビルが乱立し、区画は雑然と入り組んでいる。まるでスクランブルの寄せ集めのように。

重たげに飛んでいた蝶が、ひとりでに落下した。紙片に戻つている。表面は濡れ透けていて、大きな穴が開いてしまつてある。

辺りは暗く、そして静かだつた。街からも存在を忘れ去られたかのような弱々しい外灯があるだけで、人の気配など感じられない。こんなところに先生がいるのだろうか。もう一度、蝶を飛ばそうとした。紙片を折ろうとするものの、かじか悴んだ手ではうまく作ることができなかつた。

とにかく、探すしかない。此処にいないのなら、別の場所を。

もしも。もう、この街から居なくなつてしまつてているのなら、そのときは――

考えない。その先を、私は考えなかつた。そんなことは、考えたくはなかつた。気分がわるい。さむい。ここはなんてつめたいのだろう。「先生」声を張り上げる。私の声が、空虚な夜に反響する。

返事はなかつた。いつまでも、返事はないのだろうか。

――暗い場所。先生、どこへいつてしまつたのですか。

――寒いです、先生。どうしていなくなつてしまつたのですか。空き缶が転がつていて。男たちが歩いていた。もしかしたら、何か目撃しているかもしない。「すみません」男たちの視線が、雨に濡れた私の身体を舐めるように見回した。笑みを浮かべている。

なんだい。男の一人が言つた。私は先生の背格好を伝え、見たことはないかと訊いた。男たちは顔を合わせてにやにや笑つてゐる。さ

あな、知らないね。ああ俺も見てない。「そうですか」もう用はなかつた。待てよ。踵を返すと、呼び止められた。俺たちも探してやるよ。こっちへ来て、もう少し詳しく教えてくれよ。「結構です」魂胆は判っている。つまらない人たちにかかずらつている暇はない。

来いって言つてるだろ。男の手が伸びる前に、躱した。睨みつける。男たちはにたにた笑つてゐる。

「いやです」

先生を探さないと。「邪魔しないでください」
うるせえな、さっさと来いよ。

男が腕を掴む。痛い。他の男たちが近づいてくる。わらい声。うるさい。視線。歪んだ顔。きもちわるい。何を考えているのか、明らかだつた。

——なんで、私の邪魔をするんだろう。

振り解こうとする。強い力で引っ張られた。

「せんせい」

あの人とは似ても似つかない人が、私の躰に触れている。

「やめてください」

下卑た笑みだつた。

「おねがいです。やめて」

ふつふつと、膨らんでゆく。抑えがたい感情のざざめきが、私の躰をふるわせてゆく。

「やめてくれないのなら」

私は、男を見つめ返した。私が抑えられなくなつてゐることに気がついて、今からでもやめてくれることを微かに期待して。

けれど、意味はなかつた。男たちはわらつてゐる。馬鹿な人たち、と俯きながら思つた。つまらないだけじゃなくて、ひたすら邪魔で鬱陶しい人たち。よりもよつてこんなときに。きつと、頭がわるいのだろう。そんな人たちが、警告を無視してまで、私の邪魔をするといふのなら——

躰の奥底。

昏い熱が、波のようにうねり、碎け散つた。

「凶まがれ」

弾け飛んでいる。

足元には、シャワーで撒き散らしたみたいに肉塊が散らばっている。背骨が捩じ切れる男を目の当たりにし、ようやく蜘蛛の子を散らすように逃げ出そうとした彼らは、今や興味本位で食い散らかしたあとみたいにぐちやぐちやに積み重なつていて、どれが誰の部位なのかも判らなくなっている。

ふと、返り血に汚れた靴が目に入つた。あ、と声に出してしまった。靴だけではない。血は、服にも点々と飛び跳ねていた。

汚れちゃつた、とぼんやり眺めていると、電子音が響き、私は顔を持ち上げた。雨に打たれながら肉塊に埋もれ、携帯が滲んだ点滅を繰り返している。呼び出し音。数度繰り返すと、電源が切れたように大人しくなつた。

〔〕

ずれていたピントが、焦点を結ぶような感覚。雲つた硝子が澄んでゆくように、不意に私のなかに、私のしたことが鮮明に飛び込んできた。

「……あ……」

掠れた音が出た。喉が、詰まつたような感じ。躰に、圧し掛かってくるものがあつた。雨のように降りかかり、覆い被さるようにして広がつてくる闇。

——人を、殺めてしまつた。

魔術師ではない。ただの人間をだ。

眼前で、ぐちやぐちやになつてている。

致命的に。

取り返しがつかないほどに。

明確に、それらは死んでいた。

——先生。

携帯を取り出そうとした指先が、慌ただしく滑つた。わなわなと躰

がふるえている。おぞましい焦燥が駆け巡っている。動悸は痛いくらいにうるさいのに、全身は血が凍り付いたみたいに冷たくなつている。

視線を感じた。誰もいない。此処には私の壊した人間だつたモノ以外には、闇と、外灯があるだけだ。なのに、誰かに見張られているような気がした。私の傍らに横たわる血まみれの肉塊と、それを生み出した私の肚の底をつぶさに見透かされているような気がして、私は途方もない恐怖に締め付けられた。

おかげになつた電話番号をお呼びましたが、お出になりません。

愕然とする。なんてこと。希薄になつていて呼吸が浸水してくる感情に呑み込まれ、たちまち思考は染め尽くされた。ある戦慄に。

私、間違えてしまつた。

人を殺してはいけないという、先生との約束を破つてしまつた——おかげになつた電話番号をお呼びしましたが、お出になりません。噛み合わせた隙間から、込み上げてくるものがあつた。抑え込んでいたはずの涙とともに。唇を結んで堪えようとするけれど、次々とそれは心の隙間から溢れ出してきた。

——無機質な声ならぬ応答は、まるで最後通告のようだ。

おかげになつた電話番号をお呼びしましたが、お出になりません。

「……ああ……」

頬を伝うもの。ここに来るまでの疲労と、罪の意識と後悔とが流せる涙だつた。ふるえは止まるどころかひどくなるばかりで、拭つても拭つても、手元がよく見えなかつた。私は必死に暴れる息を整えながら、なんとか機械を操作しようとした。繋がりはしない。でも他に何も考えつかなかつた。手掛けかりはこれしかないのだから。謝らなくちゃ。そう思つた。先生に、約束を破つてしまつてごめんなさいって。はやく謝らなくちゃ。じやないと——

おかげになつた電話番号をお呼びしましたが、お出になりません。

思つてもみなかつた、こんなことになるだなんて。買つてもらつたばかりの服を、汚してしまつた。チャーム魅了を使えば簡単に追い払えただろう人を、その場の感情で殺してしまつた。そして今は、ずぶ濡れに

なつて、嗚咽を漏らしながら、繫がらない携帯に縋りつくしかなくなっている。

機械の返答は、いつまでも変わらなかつた。

——こんなこと。

——せん、せい。

こんな私を見て、あの人は何を思うだろう。約束を破り、拳句に取り乱すしかない私は、あの人の瞳にどんなふうに映るのだろう。私のしでかしたことに、あの人は憤るだろうか。悲しむだろうか。あるいは私に蔑む目を向けるかもしれない。

いつも、そうして欲しかつた。叱つてほしかつた。どんなふうに怒られてもいい。私は、どんな罰だつて受けたかつた。ただ、もう一度あの人に会いたかつた。そしてあの人と謝りたかつた。私はたぶん、なにか怒らせるようなことをしてしまつたのだろう。私は先生に嫌われるくらい悪い子だつたのだから。いい子になる。今度こそきっと、必ずいい子になります。もつとずっと、先生のお役に立てるような娘になります。頑張ります。なんだつてします。だから先生、お願ひです、わたしを――

「……、」

だけど。

その願いが叶うことはないのだと、私は気づいていた。涙と一緒に、思考を曇らせていた熱も流れ出していたから。抱き続けてきた破局^{よがん}が、ついに現実に追いついてしまつたのだと思った。頭の片隅の、ひどく冷静なところで。

——そつか。そつか。そうなんだ、わたし。

あの人が現れることはない。

何故なら私は、あの人に捨てられたのだから。

「……、」

腕を上げていられない。指先が動かなくなつた。番号を押^{そそう}すという意思も、残つてはいなかつた。ただ啞然と、此処にいる現実を見つめた。

私はこの数日間、こんな結末になるだなんて微塵も考えてはいな

かつた。母との再会に浮足立っている、何も知らない私のことを、先生は内心でわらつていたのだろうか。先生に「綺麗」と言われて、真に受けた喜んでいた私のことを、彼はばかりにしていたのだろうか。空虚だった。怒りはあつたけれど、でもそれは胸に空いた虚しさに比べればほんの小さなものだつた。「……っ、」ひやっくりのように、引き攣つた声が出た。喉がふるえ、気が付くと、それはわらい声に変わつていた。

こんなだから。唐突に思い浮かんだ。こんなだから、私は先生に見捨てられるんだ。おかしかつた。降つて湧いて出たような考えに、私は納得のようなものを感じてしまつて、だからこそわらいは止まらなかつた。おかしくておかしくて、涙が出た。涙を流しながら、私は肩を揺らし続けた。まるで悪夢みたいだと思つた。悪夢と違うのは、この景色が今までたつても決して終わりはしないだろうということだけだつた。

本当は、ずっと悪夢のなかにいたのかもしね。私はそれに、気づいていないだけだつたのかもしね。私は鈍い人間だから。もしかすると、先生はずつとそれに気づかせないようにしてくれていたのかもしね。だつて彼は、こうして私に、ずっと気づかせずにいられるくらいの演技派なのだから。

わらい声が闇に消えてゆく。私は、両腕で躰を掻き抱いた。失われてゆくものを押し留めようとするように。意味はなかつた。私が押し留めたいと思っていたものは、すでにどこにもなくなつてしまつた。

闇に、逸るような足音が響いた。

ゆつくりとそちらを向いた。誰かの気配があつた。

警官だつた。散らばつた肉塊を見て取り乱している。警官が、私のほうを向いた。銃を構えている。幽霊か化け物でも見るような形相で。

恐怖と害意。まさまさと蘇つた。もう夢に見なくなつたはずの、故郷での蔑みと恐れの視線。それが、先生の貌と重なつた。私は彼に、やさしく微笑みかけた。

——「藤乃」

上擦つた声をして、警官が叫んだ。

引き金に指が掛けられるのを、微笑みながら、私はただ眺めていた。

【3427. 14 / February 1999】

【参列せよ睡惰の徒】

糸が切れたように、警官が崩れ落ちた。

倒れ伏し、意識を失っている。少女の濡れた双眸が、倒れた警官の背後へと動いた。

闇のなかから、着信音が鳴り響いている。決して幻聴などではなかつた。やがて音が止み、少女の手元の携帯が通話時間を刻み始めた。少女はそれに気づかずに、茫々と闇を見つめている。

影が浮き彫りになるようにして、人が現れていた。スーツ姿の男。傘を差しているため、表情は判らない。もう片方の手には、携帯を握っている。

【精は肉を別たず】

【啜れ火鳥の涙珠】

ばらばらの肉塊が個々に光を放ち始めた。肉塊たちはかつてのかけ取り戻そと細胞の記憶を頼りに蠢き出し、それぞれの本体へと結集すると、続けざまにかけられた魔術で動きを活発化させ、間もなく巨人に乱雑に引き千切られたようだつた塊は、かろうじてヒトガタに再融合を果たしていた。

【浴びろ火鳥の涙雨】

新たな筋肉皮質が接合の緩い箇所を補い、臓器の活動を励起してゆく。光が収まるとき、肉塊は裸の男たちの姿になつていた。全身の骨格や筋肉総量は捩じ切られる前のものといふか別人の比重になつていたが、完全に途絶えていたはずの呼吸は正常に再開されている。

少女は、呆然と男を見上げた。男は無言のまま空中にルーン文字を描き、警官にそれらを施してゆく。忘却のルーン。少女も習つたことのある魔術だつた。

「待つてください」

男が闇に踵を返そうとした瞬間、少女は縋りつくように叫んでいた。どうして姿を見せたのか。いつからここに隠れていたのか。訊きたいことはたくさんあつた。疑問は嵐のように搔き乱し、だがどれ一つとして言葉にまとまらず、だからこそ奥底の叫び声だけが吐き出された。

「先生。私を、おいていかないでください」

男は、背を向けたままだつた。少女は息を潜めながら男の反応を待つた。このまま行つてしまふのではないか。もう二度と会えないのではないか。沈黙が恐ろしかつた。目を瞑つてしまえば楽になるだろうと思つた。実際そうするのは簡単なことだつた。しかしそれ以上に、少女は視界から彼が消えてしまうことのほうを恐れていった。

「失敗した」

ぼそりとした声が、携帯から発せられた。

「誤算だつた。ただの槍として使い潰すつもりだつた。そのはずが、……情が湧いた。崩月には不要のものだ。悲願のためには、邪魔でしかない。コンマ数パーセントの勝率と、小娘の命。比べるまでもない。なのに、それを天秤にかけて、あまつさえ俺は……」

男の声は鬱屈としており、自嘲するような響きが込められていた。馬鹿げてるな。そう、疲れ切つたように呟く。

「他に、やり方が思いつかなかつた。けつきよく慣れない真似をして、案の定だ。こうなる前に、さつさと離れりやよかつたのに。走り回つて、泣き喚いて……見ちゃいられなかつた。甘すぎるな。我ながら反吐が出るような愚図つぶりだ。死んでも治らねえ馬鹿さ加減だな」

「……先生は」

少女は、驚きのあまり涙が止まつていた。

「私を、嫌いになつたんじゃ」

男は、くつくつと肩を揺らした。少女がよく見慣れている仕草で。

「私に、怒つて……」

「いいや」

「わ、私。この人たちを……約束、破つて」

「そいつらは、まあ、そうだな。けど、べつに俺は怒っちゃいない」

「じゃあ、どうして」

「急な用事ができた。手紙、読まなかつたのか」

「ふざけないでください」

「……俺は、お前が母親のもとへ行けばいいと思つてたんだ。もしお前が誘いを断つたとしても、その頃には俺は、飛行機で遠くにいるはずだつた。その予定だつたんだ」

「違います、私が訊きたいのはつ

少女はくぐもつた声で、鼻をすすりながら言つた。ゆっくりと立ち上がりながら。

「私、もう会えないとじやないかつて。だから、私……」

深い、ため息だつた。「理由があつた」

「話してください」

「なあ藤乃。俺はろくでなしだ。自分でも嫌になるくらい馬鹿だと知つてゐる。今もそれを、証明したばかりだしな。まつたく本当に、俺は生まれたときからことん救いようがない。……怒つてるか？」

「はい」

「だよな。憎いが、俺のことが？」

「いいえ……」

「許せないだろう」

かぶりを振る。そんなことはない、と否定するように。
「理由が、あつたんですね」

「そうだ」

「先生は勝手です。ほんとうに勝手。いきなり、何も言わないで消えて。嘘までついて」

「……、」

「でも、助けてくれました」

「お前は」

押し殺すような声。

「お前は、俺に都合のいいものを見過ぎているな。教えたはずなんだがな。わかつてゐるのか。俺はお前に、平氣で、俺のために死ねと言うような奴なんだぜ」

「構いません」

少女の位置からでは、男の表情は窺えない。

「教えてください。どうしてこんなことをしたんですか」

少女は、一步を踏み出した。

「俺がもうすぐ死ぬからだ」

踏み出した一步が止まりそうになるのを、少女は泣きそうになりながら、それでも前に進めた。

「敵がいる。俺が、どうしても墜^{ころ}さないといけない敵が」

「それって……」

「どんな敵だ」

「はい」

「生きて帰れないかもしない。たぶん、生きては帰れないだろうな」

「はい」

「藤乃」

少女は、そう呼ばれるのが嬉しいというように、微笑んだ。

「やつと母親と会えたんだ。せっかく親子の時間を、取り戻すことができただんじやねえのか。そうやつて普通に暮らしていく選択肢っていうのも、お前にはあるんだ。あるんだよ、まだ」

「先生」

「なんだ」

「覚えていりますか。約束」

「——」

「約束しましたよね、初めて会った時に。あなたに助けてもらう代わりに、あなたが困ついたら、私が助けるつて。覚えてますか」

「……ああ。覚えてる。俺とお前の、最初の契約だ」

「お母さまのこと、嬉しかつたです。楽しい時間を過ごせました。でも、今の私にとつては、あの約束も。ずっと大切な記憶なんです。だ

から

少女は、男の服の裾を、そつと掴んだ。

「あの日の約束を、私にも守らせてください」

男が沈黙した。

少女は小さく、しかしあつきりと想いが伝わるように呼びかけた。
先生、と。

「……俺を助ける、か」

「はい」

「そのためなら、死んでも構わないと？」

「はい」

少女の答えは、変わらなかつた。少女が男を想つていて、男もまた少女を想つていて、ようやくそれが分かつたから。

男は「呪^{しゆ}」に縛られたように、立ち尽くしていた。

「――」

そして、男が振り返つた。もはや携帯は不要の距離だつた。開きかけた口が、戦慄くように震え、それからまた固く閉ざされた。どんな表情をしているのか。今の少女の位置からならば、はつきりと知ることができていた。

「わかった」

傘を、少女の側に寄せながら、男は言つた。

藤乃。俺と一緒に死んでくれ。

はい。藤乃是、先生と一緒に死にます。

――「残念だけどね」

「アンタに未来はないよ」

男は、琥珀色の双眸を見つめながら、占い師に言われた言葉を思い返している。

どうして間違えてしまつたのか。

いつから間違えてしまつたのか。

いつまで間違え続ければいいのか。

空を見上げた。しばらく、雨は続くだろう。
雨が、いつまで続くのか。

男には、わからなかつた。

〔 3427. 15 / February 1999 〕

やがて、■■■回目の夜が来る――

〔 3427. 16 / February 1999 〕

虫の知らせ、という言葉を信じているわけではない。だがそのときに感じた不思議な感覚は、もしかするとそうだつたのかもしれない、と女は思つた。

魔術工房は安置所^{モルグ}のように低温に保たれている。大勢の肢体に囲まれながら、女の眼前で、一体の人形が燃えていた。

「どうか」

火の気などあるはずもない部屋だつた。どこからともなく発生した炎は今や人形の全身を呑み込み、しかし炎は煙を上げず、近づいても熱を感じさせず、焼け焦げる臭いすらも発していない。その人形以外の、他の総てに飛び移ることも決してなかつた。

燃え盛る人形の首には、あざがあつた。

「おまえ、死んだのか」

つまりは、そういうことなのだろう。女はおもむろに、懷から煙草を取り出した。この場所は禁煙だと思い定めていたが、火を眺めていると、なんとなく吸いたくなつてしまつたのだ。

「……おまえも吸うか？」

人形の唇にくわえさせてやる。すると煙草の先から、しばらくし

て一筋の煙が立ち上った。葉っぱの香りが鼻先に広がつてゆく。これは感傷による幻覚か、はたまた偶然による悪戯だろうか。どちらでもいい、と女は笑つた。

「さよなら。奉月」
ほうづき

光が強くなつた。
視界が一瞬真っ白になつたかと思うと、女の前から炎は消えていた。

人形の姿もまた、なくなつてゐる。まるでそこにあつたのが、
ゆめまぼろし夢幻であつたかのように。

夢幻ではなかつた。

煙草の本数は、確かに一本ぶん減つていた。

【 映写室 】

博物館のような広さの部屋だった。

夥しい数の仮面が、壁や天井や床にまで、所狭しと放り出されて山を作つてゐる。

部屋の中央にある、黒檀を思わせる書斎机に座る人物は、映写機が映し出す物語を見つめている。

——「どれほど固い鉄であつても」。

——「どれほど怖い敵であつても」。

——「どれだけ辛い事があつても」。

逃げずに奮闘し、諦めずに懸命し、当然のように敗北した者たちの物語を、ライトは照らし続けてゐる。

物語が終わると、部屋には男が立つてゐた。

ライトを浴びた男は腹の裡に溜め込んでいたものを仮面へと移し

替えると、塵となつて、跡形もなく消えてゆく。

ライトは何もない場所を照らし続けている。吐き戻された赤色の痕跡も残つてはおらず、物言わぬ仮面たちだけが横たわっている。

映写機の稼働音に交じり、一つの足音が響いた。

足音は、ライトを遮るような位置で止まる。その足音の主である人物は無造作に、瞳の閉ざされている真っ赤な色の仮面を手に取ると、僅かに口端を吊り上げ、ひとり呟いた。

「——【次だ】

映写機は、稼働し続けている。

【 207279. 1 / December 2003 】

暗がりの部屋に、明瞭とした声が響く。

「素に銀と鉄。 磯に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至

る三叉路は循環せよ

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する】

「消去」のなかに「退去」の陣を四つ刻んで囮んだ召喚陣が、呼応するように光を発している。

「——【告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ】

光が渦を巻き、そこへ冷徹な声が重ねられてゆく。

「誓いを此処に。

私は常世総ての善と成る者、
私は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ】——』

光が収束し、大気の震動が収まつた。

「——サーヴァント・キヤスター。召喚に応じ参上しました」

召喚陣の上に、ローブで顔を隠した女が立つてゐる。

「貴方が、私の『マスター』かしら」

女の問いに、正面に立つ男が左手の令呪を見せながら頷いた。

「貴女はコルキスの王女、メディア殿で相違ありませんか」

「……ええ」

「ではキヤスター、まずは召喚に応じて頂き感謝を。私は崩月と申します。こちらは弟子の藤乃」

男の背後に控えていた少女が、慌てた様子で頭を下げる。女は両名を測るように見据えながら、どうやら地下らしい小綺麗な部屋を見回した。

「さつそくですが、場所を移しましよう。神代の魔術師殿をこのような狭い地下室に押し込めておくのは失礼ですし、何よりもこうしていては落ち着いて話もできない」

男たちは女に対してあつさり——無警戒に——背中を見せると、さつさと階段を上がつてしまつた。女はそのことに若干驚きながらも、男の後に続いてゆく。

広い廊下に出ると、女は応接間と思しき部屋に案内された。長椅子に座るよう促されると、ちょうど黒髪のメイドが台車を押して入ってきたところだつた。

「紅茶でよろしいですか」

いい香りがしていた。サーヴァントに飲食は不要だが、食べて困る

ということもない。魔力の流れを感じつつ、キヤスターは正面の二人組を改めて観察した。師弟と云うことに偽りはないだろう。男のほうが師で、娘が助手か。しかしホムンクルスに人間が弟子入りしているというのはあまり聞かない。逆ならばともかく、事情がありそうに思えた。

「ロンネフェルトの最高級茶葉を使っています。お口に合えばいいのですが」

キヤスターはカップに注がれた「液体」について〈聖杯〉による生活知識で理解すると、警戒を裡に秘めながらも、おずおずとそれを口にした。

「——あら、美味しい」

b i t e s t h e d u s t

207279 //

【 207279. 2 / December 2003 】

ほう、と吐息がこぼれていた。

好い香りがしている。鼻腔に広がり、喉を滑り落ちる粗雑のない上品な味から察するに、まずは一口と振舞われたこの紅茶がそこそこの高級な代物であることがわかつた。白磁の茶器には優れた意匠が施されており、こうして腰かけている黒革張りの長椅子も、客間に飾られてある草原に後ろ向きに女性が座っている様子を描いた絵画も、キヤスターの目を通せば容易に安物でないことが窺える。

ではそれらを所有する眼前の屋敷のあるじたる男は、果たして如何なる性質の人間なのか。自らを召喚した魔術師が成金道楽の益体ない宿痾しゅくあ持ちの収集家であるのなら、それなりの対応を取らなければならぬが。まずは見極めることね。キヤスターはそつとカップをテーブルに戻すと、それで、と水を向けた。

「どうするつもりなのかしら、これから」

「いくつか確認しても？……聖杯戦争について、どのような理解をされて いますか」

聖杯戦争。

七人のマスターと七人の英サーゴアント靈が、万能の願望器を巡つて殺し合う魔術儀式。

「その通り」ですが、と男は付け加えた。「それが、すべてではない」「どういうこと」

「お話しします、ですが先に確認をさせてください。貴女の宝具を」
躊躇ハラハラいがあつた。コルキスの王女であるキヤスターは「二ーベルン
ゲンの歌」における英雄ジークフリードが振るつた聖劍のような武

具は所持していない。よつて今回の現界においてキヤスターが手にした宝具は、キヤスターの逸話が具現化したものだつた。そこに英雄性などではなく、ましてや己が誇るべき輝きもない。これを知つて、この男はどんな反応をするのか。内面をローブで覆いながら、キヤスターは懐から短剣を取り出した。

「それが――

〈ル'ル'ブレイカ'
破戒すべき全ての符〉。

斬りつけることで、ありとあらゆる魔術的な存在を破戒する概念道具。

すべてを失つた裏切りの魔女の逸話が皮肉にも宝具へと昇華されることで手に入つた、対人ならぬ対魔術宝具。

「なるほど。……ちなみに訊いておきたいのですが、金羊の皮アルゴンコインは所持していたりは？」

憂鬱が裡に膨らむのを感じながら、かぶりを振つた。あれは持ち合わせてはいないと。

「わかりました」

男の反応は、非常にあつさりとしていて、キヤスターの予想を裏切るものだつた。落胆するどころか、かすかに喜色を滲ませてさえる。「ええ。惜しい気もしますが、特に何も問題はありません」明かしてキヤスターのほうが、じやつかん狼狽えてしまつていた。

「では最後に。キヤスター、貴女の聖杯にかける願いは？」

「……『故郷』に帰ることよ」

動搖を隠しながらそう言うと、ようやく男の顔に戸惑いが現れた。

「故郷というと、……つまり、コルキスに？」

男は小さく唸ると、額に手をやつて考え込んでいる。キヤスターはその間に、男の隣で静かに座つている少女へ目をやつた。

始めは少女という印象だつたものの、明かりの下で見ると二十歳を過ぎているのかもしれない。長くて美しい髪を持つ娘だつた。魔術師の弟子にしてはらしさがあまり感じられない。キヤスターの視線を感じたのか、彼女の胸元でエメラルドのペンダントが揺れながら煌めいた。

「キヤスター。正直に申し上げると、貴女の願いの種類が過去改編もしくは時間旅行の場合、これに必要なのは第二魔法か、でなければ第五魔法になります。それを、聖杯という願望器で叶えることは難しい」

「なんですって——」

「なので」

男はキヤスターを制すると、ローブに隠されている双眸を見透かすように、にやりと笑いかけた。

「ひとまず、グルジアに向かいましょう」

「……は？」

【 207279.3 / December 2003 】

窓の外には、地平線が見えている。

「ねえ」

キヤスターは、空を飛んでいた。飛行機と呼ばれる空飛ぶ鉄の箱舟に乗り込んでいる。現世に召喚されたときには、まさか高度一〇〇〇〇メートルを飛ぶことになろうとは考えもしていなかつたが。

魔術ではなく科学を用いて引き起こす現象に幾分かの不安はあつたものの、今のところ落下する気配はない。仮にも魔術師でありながら平然と電子機器に頼る男に想うところがないでもなかつたが、しかし敢えて指摘して不和を引き起こす必要もなかつた。

「さつきから、何をしているの？」

飛行機には藤乃と男とキヤスター、飛行操縦士と客室乗務員しか乗っていない。貸し切りだつた。気を遣つたのだろうか。キヤスターは、いまいち男の本心が読み切れずにいた。

魔術師が「使い魔」に向ける態度を考えると、この男の応対は「甘い」と言わざるを得ない印象だつた。サーサヴァント英靈は危険物であるし、何より自分は「裏切りの魔女」で「ルーレブレイカ破戒すべき全ての符」というキワモノを持った存在なのだ。短慮な魔術師であれば令呪で「自分に宝具を使うな」ぐらいは命じようものだが、男からは基本的に行動を縛るつ

もりはないと言っていた。靈体化も、必要がなければしなくともよいと。

まさか色目を遣つてはいるのかとも過ぎつたが、視線に邪なものは含まれていない。敬意を払われていると感じるし、友好な関係を築きたいと考えているのかもしれない——、うしてわざわざグルジアへ向かっていることなど、まさにそうだ——が、だからこそ聖杯戦争を勝ち抜くための万夫不当の英靈たちと渡り合えるような戦闘力を持つとは思えない非力な自分に信頼を寄せる態度でいる男の内心が、気がかりだつた。

「株資産の運用です」

ノートパソコンから顔を上げると、男は眼鏡を外しながらそう言った。

——株?

「兵站の充実は必要不可欠ですから。兵糧^{ひょうろう}を増やすための作業だと思つていただければ」

グラスを呷ると、苦笑しながら続ける。「部下に任せられればいいんですけど、理解させるとなると、これがなかなか複雑で難しい。こういうときほど、黄金律があればと思いますよ」

「黄金律……？」

首を傾げると、ああ、と男は察したように頷いた。

「『Believe in the Lord is the golden rule』主^Bを信^eじるこⁱとが黄金律^{the golden rule}』とはまた違つた観念の、黄金をもたらす確率のことです。簡単に言うと、星の巡りを現したレトリックですね」

関心の薄い相槌になつた。〈聖杯〉から知識が与えられているとはいえ、流暢に理解するには慣れが必要だつた。

「あつ」

キヤスターの隣に座る、藤乃が不意に声を上げた。

「どうした？」

「いえ。今のフレーズ、どこかで聞いたことがあると思つたら……そつか。ホンキイ・キヤツト」

急に言つたかと思えば、勝手に一人で納得している。この娘も、

キヤスターを恐れてはいなかつた。むしろキヤスターの時代のことについて質問攻めにしてくるほどだ。大人しそうな見た目に反して、物怖じしない性格らしい。とはいえ害意は感じないため、キヤスターもそう悪い気はしていなかつた。

「……」

ふと、眼下に目をやつた。

飛行機に乗つて、数時間が経つてゐる。

黒海の向こうに、見覚えのある地形が現れていた。

「キヤスターさん？」

信じられない、という驚きと共に、懐かしさが胸に込み上げてくる。キヤスターは、ちらと男を覗いた。

彼は、何も言わずにこちらを見つめている。キヤスターは感情を読み取る前に目を逸らすと、再び景色を眺めることにした。

しばらくして離着陸特有の浮遊感を過ぎると、飛行機は国際空港に着陸した。男が用意したパスポートで入国審査を通り抜けると、キヤスターはいよいよ故郷の土地を踏むこととなり、緊張している自分を嫌でも意識せざるを得なくなっていた。

空港を一歩出ると、記憶のそれとは似ても似つかない景色が広がつていた。

様々に行き交う車両の騒音。

様々の人種の喧かまびすしい合唱。

「行きましょう。ここから先は車になります」

人込みを避けた場所で男が紙片を取り出し、簡単な結界を周囲に敷いた。知性あるものの意識を逸らす、魔術とは異なる呪術だと判る——術者である男の技量の程も。続いて紙で作られた小箱を足元に置くと、独りでに開いた小箱から「自動車」が現れた。

どうぞどうぞと藤乃に押し込まれ、あれよあれよという間に乗車させられる。大勢が乗り込むバスと比べれば衛生的に我慢できる環境ではあるけれど、どうして他と違つてこの車にはドアが二つしかないのだろうか。「クーペは、そういう車種なんです。そこがいいんですよ」意味が分からなかつた。だからといって、キヤスターは不思議と

靈体化しようとは思わなかつた。

それから更に数時間をかけ、後部座席で藤乃がうたた寝をし始めた頃、キヤスターの目に飛び込んできたものは、上空からも確認できていた、あの懐かしの「ファシス川」だつた。

現代ではリオニ川として知られる川であり、この川の先に、果たしてその「街」は今も存在していた。

「着きましたよ。ここが」

クタイシ。グルジア^{ジョージア}第二の都市とされる街。
かつて、コルキス王国が存在していた場所。

——我が故郷。

クーペは中心部へ進み、オペラハウスの近くで停車した。観光客らしき男女の集まりが、噴水の前で写真を撮つてゐる。キヤスターは、夢心地の気分で車から降りた。ローブ姿でいるキヤスターに好奇の視線を向けてくる者はいない。人避けの魔術など、容易いものだつた。

「見て回りますか」

「……ええ」

男は、一人で回ることを許可してくれた。信用されているのか、侮られているのか。今のキヤスターにとつては、眞実はそのどちらでも構わなかつた。

「」

面影は、やはりどこにも残つてはいない。城も、城下も、神殿も、靈脈も、空氣も、民も。何もかもが。コルキス王国のみならず、多くの国が此處で興り、そしてこの地で塗り替えられてきたのだ。あれから何一〇〇〇年も経つてゐる。ならばこの結果は、分かり切つてゐることでもあつた。

——それでも、覚えているものはある。

街が、夕焼けに照らされている。その光景を一望できる丘に立ちながら、キヤスターは顔を覆うローブを解いた。いつの間にか背後に立つていた彼へ、問い合わせるようにして呟く。
「過去へは戻れない。そう言つたわよね」

「ええ。冬木の聖杯で、貴女の願いを叶えるのはおそらく不可能です。
少なくともあれは、決して万能の願望機などではありません」

ですが、と男は続けた。

「貴女が望めば、貴女はもう一度やり直すことができる。魔力によつて編まれた仮初の躰ではなく、一個の生命として肉を得、この世に根を下ろし、貴女自身の意思によつて再びこの地を踏むことができる」

「……受肉」

「ええ」

沈黙が流れた。

一二月の風が、吹き抜けてゆく。

「いいわ」

キャスターは振り返ると、男を見つめ返した。

「誘導されたようなのが少し癪ですけれど、貴方の計画に乗りますよう。マスター」

「そうですか」

マスターは初めて、ほつとしたような笑みを浮かべた。

「感謝を、キャスター。貴女の協力は、とても心強い」

——そんな、子供みたいに気を抜いた顔を裏切りの魔女に見せるだなんて。

——まあいいわ。今だけは見逃してあげましょう。

「何も成し遂げていないうちから、感謝なんていりません。……それは、私が言うべきことだわ。此処に、連れてきてくれて」

ただ、気になることがあつた。

「私が断つたら、どうするつもりだつたの」

口にしてすぐに、これは失言であると気づいた。相手は、苦笑いしている。問うまでもなく、決まり切つていてことだつた。

あれほど遠いと思つていた景色を見ることができたからだろう。気が緩んでしまつたのは、どうやら自分もだつたらしい。これでは、彼のことを笑えない。

「……安心なさい。貴方が私を裏切らない限り、私も貴方を裏切らな
い」

「信用しています。行きましょう、キヤスター」

——行つて参ります、お父様。

「あつ。キヤスターさん」

「藤乃。これから世話になるわね」

「……はいっ。よろしくお願ひします」

【 207279. 4 / December 2003 】

暗がりの部屋に、明瞭とした声が響く。

消去のなかに退去、退去の陣を四つ刻んで囮まれた召喚陣が、呼応するよう光を発している。

——【告げる】

光が渦を巻き、そこへ冷徹な声が重ねられてゆく。

【抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ】——

光が収束し、大気の震動が収まつた。

——サーヴァント・アサシン。影より貴殿の呼び声を聞き届けた

召喚陣の上に、白貌の仮面をした大男が立つてゐる。

【貴殿が私のマスターか】

「はい。私があなたのマスターです、アサシンさん。藤乃と言います」
私は魔力が失われた倦怠感に襲われながらも、しつかりとそう返事をした。するとアサシンの意識が、私の背後に飛ばされた。

「貴殿らは——」

「そこの藤乃の師をやつてゐる、崩月と言う。そしてキヤスターのマスターでもある。俺の心臓に短刀を突き立てる前に貴方と話がした

い

「なぜ、他のマスターがここにいる」

「俺たちの願いは恐らく競合しない。貴方の願いを叶えると同時に

我々の願いを叶える計画がある」

「聞いて下さい、アサシンさん」

頼み込んだ。もし彼が敵意を見せた場合、先生の予想通りに私の掌に召喚と同時に現れた令呪を遣わざるを得なくなつてしまふ。それは先生の計画に、大きな支障をもたらしかねなかつた。

「話を聞こう」

暗殺者の声が、低く響いた。張り詰めた空氣に、殺気が滲みだしている。

正面からそれを浴びているはずの先生は、けれどまるで動じていなかつた。

「アサシン。貴方の願いは」

話が終わるまで、私はじつと耐えていた。

「

やがて、殺気が収まる。

「……いいだろう。私は、マスターに従う。だが」

アサシンは、話の間ずつと黙り続けていたキヤスターに目をくれると、言葉を止めた。キヤスターは口元にかすかな笑みを湛えると、翻りざまに靈体化してしまつた。

「話の続きは、こちらで。……行くぞ、藤乃。大丈夫か」

頷いたものの、本当は思つていたよりも消耗が大きかつた。先生と昨日パスを繋いだおかげで、意識を失うほどではなかつたけれど、それでも英^{サーサ}靈^{アント}を召喚する行為は——キヤスターの手助けがあつたとはいえ——魔力量の少ない自分には辛いものがある。

よくやつた。囁くように言われ、私は耳が火照るのを感じた。

先生のあとに続き、私も部屋を出る。

【 207279. 5 / December 2003 】

私が知るメイドたちのなかで最も胸が大きく背も高いアスタマキナが入れてくれた紅茶を飲みつつ、私たちは客間で情報交換を進めた。

すべてが終わった頃には深夜であり、そのあとは体力の回復に努めると、翌朝になつて顔を合わせた私たちに対し、先生はやはり、いつものように少し皮肉な笑みを浮かべながら言つた。

「——それでは、aignツベルンに乗り込むとしようか」

映画がすぐ良かつたから気が付くと色々飛ばして
桜編書いてた

【 999837. 2 / January 1994 】

暗い部屋だつた。

なにも見えない。

光は届かない。扉は閉ざされている。

ここには、なにもない。

蟲の這いずる音だけが聞こえる。

蟲の這いずる音だけは、消えてくれることはない。

心の奥底で軋む誰かの悲鳴が、何千何万という細かくて小さな脚が
肌の上を這いずり回るものたちの蠢きで搔き消されてゆく。

蟲藏を埋め尽くす蟲たちの蠢動に呑み込まれ、ココロとカラダが喰
い削がれてゆく。

瞳を閉じる。目蓋を開く。暗闇が常にそこにある。

耳を塞ぐ。耳を澄ませる。嘲笑は常にそこにある。

扉が開いた。

現れた誰かが言う。——必ず君を助けるよ、と。

扉が開いた。

斃れた誰かを見下ろして思う。——ばかなひと、と。

うそつき。

うそつきばかり。

ばかな人たち。

ばかな私。

姉さんは現れない。私がこんな目に合っているのに、姉さんは私を
助けてくれない。

どうして私はこんな目に合っているのだろう。どうして私がこん

な目に合わないといけないのだろう。

姉さんも。お父さんも。お母さんも。誰も私に気づいてくれない。私はいたらない子なのだろうか。だから誰も助けてくれないのだろうか。

御爺様が笑っている。蟲たちに犯される私を見下ろしてとても愉快そうに。

扉は閉ざされている。

考えなくなつた。もがいても疲れるだけだから。濁つてゆく。穢れてゆく。

抗いはしない。

うるさい喉は、虚無で塞いだ。あたまのなかは、真空で埋めた。今日も。明日も。変わらない毎日。私は、蟲たちに犯され続ける。

扉が閉ざされた。

扉は閉ざされている。

蟲たちの嘲笑を聞きながら、私は冷たい地面に横たわる。冷たさを感じないように「わたし」を投げ出して。肌に群がる蠢動を聞き流し、軋む奥底の悲鳴を押し殺そうとする。

でも、私はまだ完璧ではなくて。

ばかな私。

よわい私。

——だれか、たすけて

もはや意味すらもわすれた、意味のないことばを。

わたしは誰にも気づかれないと知りながら。

今日も。明日も——

「融かす舌」

扉が開かれた。

蟲の這いずる音しか聞こえないはずの牢獄に、悲鳴が響く。

陽光など届くはずもない暗い奥底に、眩いほどの光が輝く。

【融かす舌】

【融かす舌】
[フアイラ]

【招け睡惰の深淵】
[アスリブガ]

誰かの透き通るような声。

蟲たちではない。御爺様のものでもない。

足音が聞こえる。

私は期待しない。誰も私に気づいてはくれなかつたのだから。
足音が近づいてくる。

「〔元柱固具〕。〔急急如律令〕……こいつはひどいな。〔剥落せよ病魔〕

〔呪を以て魔を破す〕〔魔を以て呪を却す〕

何処からか吹き込んだ清浄な風が、濁つていたものを打ち消してゆく。ごごつていたものが、脱皮するように内側から剥離してゆく。

誰かの気配。

「起きているか」

声に、意識を繋ぎ留められて。結び引き上げられてゆく。
いつもならありえないことなのに、私は、目蓋を開いた。

知らない人。姉さんではない。お父さんでも。その人の目の前で、
ひらひらと蝶々が蒼い光を放つていた。その光は男の足元まで照ら
し出し影を作り出せるほどに明るいはずなのに、決して強過ぎる印象
はなく、まるでランプのように男の顔を浮かび上がらせている。どこ
か皮肉めいていて、憂鬱そうな顔を。
肌の上から、蟲たちが消えていた。

〔貴様〕

部屋の四隅に闇が滲みだし、きしきしと蟲たちが湧き出した。「何
奴——」けれど、私に近づくことはない。

蟲たちの塊が、御爺様のかたちになつた。

「初めは干渉するつもりはなかつたんだが。気が変わつてね」

「目的は桜か。さては雁夜めの」

男は私を見下ろしながら、口元を歪めた。「会つたこともなければ
話したこともない」嘲笑とも憐憫とも違う、しいて言うなら呆れるよ
うな笑みを浮かべて。

「だが用が無けりやわざわざこんなところまで出向かないのも事実

だ。お嬢さん。俺はね、君に用があつて来たのさ」

どうする？ 男が言う。気安い口調で。

「助けてほしいか」

——うそ

「何処の者とも知れぬが、愚かな」

御爺様が杖を鳴らす。蟲が翅を鳴らして一斉に飛び掛かろうとするけれど、男を中心に四方の床に張り付けられたお札を境に透明な壁が生じたかのように、蟲たちは近づこうとして弾き飛ばされている。

「お嬢さん」

気にしたふうもなく、男は私を見続けていた。

私は意識が不思議にはつきりした状態で、初めて見る御爺様の普段と違う様子を知覚しながら、けれど男だけを視界に捉えて、男のことばの意味が染み込んでくるのを感じた。

「俺は、君を助けることができる。この蟲藏から連れ出して、この地獄を終わらせることができる……だが俺は魔術師の例に漏れず外道ですね。慈善活動家じやないんだ、対価を要求する。たとえ君が、虐待で衰弱しきつた幼女だとしても」

これは取引だ、と男は言つた。悪魔のように誠実でアンフェアな契約さ、と。

「俺の手を取るのなら、俺は君に比較的安全で成長できる環境を提供しよう。君が失った居場所の代わりに君の帰るべき家を作り、そこでの温かな食事と健やかに安眠できるベッドを与えよう。少なくとも此処にいるよりかは遙かに衛生的だしまし環境だと自負しているよ。そしてそこでの生活と身分を与える代わりに、君には、俺の願いを叶えるための手伝いをしてもらうことになる」

私だけを見つめる男の声は、私のがらんどうな奥底にまで響き渡つてくる。

「どうだろう。もし君が俺を選ばなくとも、君はそのうち救われるかもしれない。そのために一〇年近い歳月がかかるかもしれないが、このままでいても君は、君に仕組まれた運命を知ることができるだろう。しかし君が運命に選ばれる保証はどこにもない。運命というや

つは……とても気まぐれで、残酷だからな。だがもし君が俺を選ぶのなら、俺もまた君を選ぼう。——お嬢さん、俺には君が必要だ

「たわ言を。これしきで防いだつもりか」

【滾^ダ々と溢れよ暗黒】

暗がりよりも昏い常闇が、御爺様を包み込む。喚く御爺様の躰を押し潰し、常闇が晴れると御爺様は消えていた。

蟲の声も聞こえない。男の声だけが聞こえている。蝶々が蒼く羽ばたいている。

「もう一度聞くぞ。助けてほしいか」

喉が震えた。男の声とことばは、私が作った私を擦り抜けて「わたし」を引き上げようとする。

乾いていた傷口から血が滲み出すように。傷口が、血を流すことを思い出すかのように。

虚無で塞いでいた喉が、押し殺されていた意志を発しようと、消えかけのことばを紡いだ。

「おじ、さんは」

ひどい声。男は目を丸くすると、苦笑しながら肩をすくめた。

「ホウヅキだ」

「……たすけて、くれるの？」

「ああ。君が望むのなら」

溢れそうになる。奥底に封じ込めていたものが、一気に表出しそうになる。

ほんとうに此処から出られるのなら。

——このひとがうそつきでないのなら

地獄で私を見つけてくれて、私を必要としてくれるのなら。

私は、叫んでいた。

「たす、けて」

【——交渉成立だ】

男の手に、十字を模したレイピアのような剣が何処からともなく現

れる。しゃがみ込んだ男の大きな手が、そつと私の額に触れた。

「よく頑張つたな」

泣きたくなるほど、やさしい声だつた。

【参列せよ睡惰^{スリブル}の徒】

「……今は疲れ。次に目覚めたときには、すべて終わつてるさ」

「貴様はつ」

御爺様の声。しかし今は、それすらも遠い。

意識が、穏やかに薄らいでゆく。

「早いな。それにしぶとい。悲願のために積み重ねてきたものを、まつたく関係のない部外者に台無しにされる。ま、報いだよな。ただ客観的な指摘になるが、遅かれ早かれ、どうせあんたは失敗していたろうよ。自分が何をしたかったのか、肝心なところさえ、忘れちまつてるんだから」

「な、なにを」

剣が、私の心臓を貫く。

痛みはなかつた。恐怖も。するりと引き抜かれた剣の刃先で、何か醜いものがじたばたしていただけれど、瞼が重かつた。

「心は肉を離れず」「啜^ケれ火鳥^{アラ}の涙珠^ダ」

「までつ、なぜ……」

「あんたの魂に用はない。濁り過ぎてて質が悪いからな。毒された聖杯の破片も必要ない。正直に言うと、あんたの志は尊敬していたよ。嘘じやないさ、皮肉でもない。人類救済を本気で考えるなんざ、大したものだよ。俺は、自分ひとりを救うだけでも、これだけ苦労してるつていうのにな。本当に立派だと思う」

【我が祝福を注げ血潮^ル】

「さようなら、マキリ・ゾオルケン。次はうまくやることだ。まあ、あなたに来世^{つぎ}があればの話だが」「やめ——」

【絶^ア尽^ダせよ靈柩^ダ】

炎。
光。

「■ ■ ■ ■ ■」

嘲笑う声が燃え去り、柔らかな時間が満たされてゆく。
暗がりに色彩が差し、暖かな空気が取り戻されてゆく。

「さて。行こうか、お嬢さん。——桜」

怪物は消えた。

寒くて苦しい場所に閉じ込められている理由も、もう、なかつた。
扉は開かれている。

「サクラ。起きてください」

——そんな声が聞こえて。

私は、夢から目を覚ました。

〔 999837. 3 / February 1998 〕

覗き込まれている。

鳶色の瞳。紅色の髪。

綺麗な人。

ぜんぜん御師さま——では、ない。

「ダメットさん……はつ」

何故かわからないけれど、顔の正面にあつて反射的に口にしてしまつたのは御師さまが前にぼそりと言つていた彼女の呼び方で、咄嗟に出たのは日本語であつたから意味は通じなかつたようだけど、男装の麗人は「ふざけんな……？」と別の意味に受け取つたらしく、眉をひそめている。

私は慌てて身体を起こすと、彼女に謝つた。

「ごめんなさい。何でもないです、バゼットさん」

「……大丈夫ですか、サクラ。うなされていましたが」

大丈夫ですと答えながら、私はどうして客間のソファードで横になつ

ていたのかを考える。さっきまでは、そうだ、私たちは屋敷地下の鍛錬場で訓練していたはずなのに。

「魔力切れで気を失つたんですよ。少し追い込み過ぎましたね」

バゼット・フラガ・マクレミツ。魔術協会の凄い人で、御師さまにも本氣で接近戦はやりたくないと言わしめるほどの武闘派。ルーン使い。私の七つ年上。そして私の戦いの先生もある。

身体からは、訓練で負つたかすり傷も消えていた。服も、いつの間にか普段着に変わっている。

「はい。どうぞ、桜」

「ありがとうございます、藤乃姉さん」

姉弟子の、藤乃姉さんが紅茶を入れてくれる。バゼット師の前にも置かれ、テーブルには茶菓子が並んでいた。

「私、怪我していたはずなのに。もしかして、藤乃姉さんが？」

「ううん。先生です」

御師さまが治してくれた。ということは屋敷に帰つてきていると
いうことで、もうそんな時間ということになる。

「……」の恰好

「安心して。そつちは先生じゃなくて、私が着替えさせました」

私は安堵しながらも、同時に羞恥を覚えてカツッパに口をつける。魔力切れで意識を失うだなんて、半人前もいいところ。魔術を本格的に習い始めて三年が経つというのに。

レモン・ティーは、疲れていた身体に染み入るようだつた。

「落ち込む必要はありません。私と対峙しても心が折れなくなつた、打ち返すことができるようになつた——それだけでも進歩と言えるでしょう。こう言つては何ですが、初めの頃は、立ち続けることすらままならなかつたのだから」

それはそうかもしない。本気の圧力を放つバゼット師はとつても恐ろしくて夢に見るくらいで、最初の一週間はこんな修行法を課した御師さまを虚数の闇に落としてやりたいくらいには恨んだほどだつたのだし。

「私まだまだ未熟です、虚数の壁を貫けないとは。鍛えが足りない

と実感しました。精進します」

凛とした風貌に、外見の想像からは懸け離れた「破壊」——コンクリート柱を殴るだけで倒壊させる力——を誇るバゼット師は今でもじゅうぶん恐ろしいというのに、切り分けられたケーキを一口で食べながら背筋が寒くなるような決意を固めている。

客間の扉が開いた。メイドのオルテミリヤが台車を押しながら入ってくる。中身は追加のケーキだつた。最近は、バゼット師が屋敷に来るたびに大量の甘味が振舞われるのが恒例になつていて気がする。「ケーキは脳の補給に役立ちますから」と師は言うけれど、やっぱり甘いものが好きなのだろうか。師の味覚がおんちなのは知つてゐるけれど。

私が二つ目のケーキに舌鼓を打つていると、御師さまが入つてきた。

「起きたか」

「はっ、はい」

「立たなくていい」手で制しながら、四つあるソファーの一つに腰を下ろす。藤乃姉さんが入れた紅茶を受け取ると、御師さまはそつと肩を緩めた。それから、バゼット、と言う。

「鍛えてくれと雇つたのは俺だが。流石に何度も弟子がぶつ飛ばされるのを見るとな。重症ではないし、加減は、してくれているんだろうが」

「もう少し優しくしようと? 難しいことを言いますね、ホウヅキ。敵に懷まで踏み込まれた場合の戦い方を教えてくれと依頼したのはあなただ。羽毛のように軽い打撃では何も学ぶことなどできない、死を意識してこそ——」

「クライアントの要望を受け入れるのもプロだぜ。そしてこの場合のクライアントってやつは、俺さ」

バゼット師の目が細くなる。御師さまは気づいているだろうに、涼しきな顔だった。

「……私にはこのやり方しかできない」
呟くように言う。

「あの、御師さま。バゼットさんはだいぶ手加減してくれていますし、私は大丈夫ですから」

怖いのは相変わらずだけれども。もしバゼット師が本気を出したら、私は今頃ブルドーザーに押し潰されるプラスチック・トイみたいに原型をとどめていないだろう。じゅうぶんに配慮されているとも言える。

あ、これしんじやうかも、と思ったことは何度もあつたけれど。どういうか、両手両足の指で足りないくらいにはあつた気がする。弟子入りしたのはここひと月のことだというのに。

……いや、さすがに多すぎなのでは？　私はまだ一〇歳にもなつてないのに。それでもじやつかん落ち込んでいるバゼット師を見ると、あまり強いことは言い出せなかつた。私がよわいから戦えないのは、悔しいけれど事実なのだし。

「やり方を任せると言つたのは、俺か」

悪かつたな、と御師さまが言つた。バゼット師は視線を逸らすけど、小さく頷いていた。

「まあ、これからも頼むよバゼット。お前のことはなんだかんだで信頼している」

「なんだかんだとは何ですか。……努力します。サクラは、私に初めて初めての教え子ですから。死なせたくない」

少し雰囲気が悪くなりかけたところで、藤乃姉さんが明るい声を出した。

「私の時は、そんなふうに心配はしてくれませんでしたよね、先生？」

「そうだつたか？」

「そうです。別に格闘戦のことだけじゃなくて……術式の構成を間違えていたのに先生は気づいておきながら何も言ってくれなくて、そのせいで私、何度も危ない目に合いました。私だけじゃなくて他の子も近くにいたのに。バゼットさんを言えませんよ」

「そうだつたかな」

困惑気味の御師さまだつたけれど、ふと思いついたように懐に手をやると、しまつていたらしい小箱を取り出した。

「土産があつたんだ。桜に」

「あら、お話を逸らすつもりですか？」

苦笑しながら、私に手渡してくれる。綺麗に包装のされた、縦に長い小箱。それほど重くはない。

「これは？」

「開けてみろ」

促されて開くと、中には――

「あ……」

シルバーのチェーンに吊られた、海のような色の宝石。アクアマリンだった。

「お、御師さま。どうして」

綺麗で、吸い込まれそうになるけれど、これってまさか。もしかして。慌てる私を見ながら、御師さまは肩を揺らした。

「三月の誕生石。これから伸び盛りのお前に似合うと思つてな、ようやく準備が整つた。まじないが掘つてある。お前を守つてくれるだろう」

「よかつたですね、桜」

藤乃姉さんの胸元では、エメラルドのペンダントが揺れている。

御師さまから贈られたペンダント。秘蔵の、世に二つとない宝石らしい。確かに、そのことを羨ましく思うことはあつた。だけど藤乃姉さんは、御師さまの手伝いを色々とさせてもらつて。御師さまに助手として頼りにされているのだから、当たり前のことではあつた。なのに、役に立つどころか迷惑しかかけていい立場の私が同じものを感じるのは、浅ましいことだと思つていたのに。

「私、……ぜんぜん、だめなのに」
違う。言うべき言葉はそうじやない。ありがとう、と伝えるべきなのに。

言えずに俯いてしまうと、御師さまが立ち上がった。

「お前は、よくやつているよ」

ふわり、と頭を撫でられた。
大きな手。

御師さまが、私を見つめている。優しい顔で。

いつもは皮肉ばかりで、無茶な訓練もさせるし、愚痴もこぼすし、意地悪もするし、大音量で「デスマタル」を聞くし、よくわからない実験を思いついて被験体にさせられたりもするし、こわい顔なのにものすごく甘党だし——なのにこんなときだけ、いつも優しくしてきて。するい。

——あんな夢を見たからだろうか。

たぶん。きっと、そうだ。

「ありがとうございます。……大事にします」

いつしよう、大事にします。

「ああ。そうしてくれ」

「……でも」

「うん?」

私は、今までの私ならば泣いてしまったかもしねないけれど。今は、強くなろうと努力していく、確かに前に進めているから。せめて、と顔を上げて、笑顔で言つた。

「どうせなら、誕生日に欲しかったです」

御師さまが声を上げて笑う。「言うようになつたな、桜」
藤乃姉さんも、バゼット師も。オルテミリヤも。

もちろん私も。

楽しくて、嬉しくて。

自然と笑みがこぼれるのを感じながら、今日も私は、日本ではないところで生きている。

「ああ。考えておこう」

それから五日後、一〇歳になつた私が学校の友だちと家族からもらったプレゼントの中には、『誕生日おめでとう。桜』——御師さまからの手書きのバースデイ・カードと一緒に普通に可愛いぬいぐるみが入つていて、私が驚かされたのは言うまでもない。

「バゼット、夕食はどうする。近場のチエーンで済ませるくらいなら、
食べて行けよ」

「……そうですね。ではお願ひします。何でもいいので。量は多め
で」

「「知つてゐる」」

バゼット師が大食漢なのは、みんなが知つていた。